
空と輪廻と万華鏡

みえさん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空と輪廻と万華鏡

【Nコード】

N6143C

【作者名】

みえさん。

【あらすじ】

高校卒業間際、付き合っていた城沢隆明に酷い振られ方をした藍。卒業し、幼なじみの安吾と付き合いながらも、彼女の心の中にはいつもどこかに隆明の姿があった。そんなある日、息抜きで訪れた天文台で彼女は潤という高校生と出会う。彼はどことなく隆明に似ていて……。

プロローグ まだ誰も知らない最初の話（前書き）

この物語には暴力シーン、虐待に関する描写などが含まれています。あくまで物語を演出するための表現であり、助長する目的はありません。

軽度ですので特に年齢指定などはしていませんが苦手な方は自己責任でお読み下さい。

プロローグ まだ誰も知らない最初の話

空は青く晴れている。

桜も咲かない三月上旬はまだ寒い時期だというのに日差しはもう夏近くなった五月のように暖かだった。

隆明は屋上のフェンスに寄りかかって流れる雲を見上げた。

綿菓子のように真っ白で混じりけのない白が、青い空を泳いでいく。

雲に乗ってのつてみたいと子供の頃に描いた夢を漠然と思い出していた。

乗れないと知った時はショックで泣きたくなった。まるで何かを失ったかのような喪失感は今当時重大な事だった。

今思えば雲に乗れないなんて笑える程度の事だ。けれどそれは確実に今よりもずっと鮮明に感じていたことだ。

もう、それだけの強い想いはない。

ばたん、と階段に続くドアが開いた。

隆明は顔を上げてそれが誰なのかを確認する。

「なんだよー、安吾怖い顔して」

へらり、といつも調子で笑ってみせると彼は顔に朱を上らせた。

「藍と別れたって本当なのか？」

「何だ、そのことか」

隆明は気のない風に返す。

本当は安吾がどんな理由でここに来たのか分かっていて。さしずめ泣いている藍を心配して話を聞いたのだろう。泣いている理由を聞いて安吾が隆明を責めない訳がない。

安吾は藍のことが好きなのだ。

「そのこと、じゃないだろう？　どういう事だよ、あいつ泣いてたぞ」

「・・・だろうね」

「お前！」

胸ぐらを捕まれても抵抗する気にはなれなかった。

彼は今にも殴りかかりそうな形相で睨みながらも、必死でこらえている様子だった。ここで殴るのは違うとか考えているのだろう。

隆明は嘲るように笑った。

「良かったな、これであいつはフリーになったぜ。傷ついているの慰めてモノにしちまえよ。好きだったんだろう？　ずっと」

「・・・んっの！」

左頬に衝撃が走る。

がしゃん、とフェンスに身体が当たる。

耳たぶからころりとピアスが落ちて転がった。

誕生日の時に、藍がプレゼントしてくれたピアスだ。どうせ捨てようと思っていたところだからちようど良い。

転がったピアスを見つめながら彼は口の端を拭った。

血の味がした。

「お前あいつのこと好きじゃなかったのかよ！」

「俺は誰のことも好きにならねーよ」

言うのと、彼の表情が強ばる。

「・・・じゃあ何であいつとつき合ってたんだ？」

隆明は見下した様に笑った。

「お前に対する嫌がらせだよ」

「なっ・・・！」

「別に暇つぶしになるなら誰だって良かったんだよ。まあ、もうすぐ卒業だし、お前らにこだわる必要もない。だから返してやるよ」

いつものように隆明は満面の笑顔を浮かべる。

殴られた後で、そんな言葉をいいながらする表情ではない。分かっているわざと彼は笑ったのだ。

安吾の瞳が怒りに燃えたのが分かった。

それはそんな理由で彼女を傷つけたことからくるのか、あるいは親友だと思っていた相手に裏切られた想いからくるものなのか。

笑いながら隆明は彼を見る。

安吾は顔を背けた。

「お前が！・・・お前が、そんな奴なんて知らなかったよ」

「幻滅させて悪かったな。けど、俺はずっとこんな奴だったよ」

「くそつたれ！」

吐き捨てて、彼は屋上から出て行く。

乱暴にドアが閉められ階段から何か八つ当たりするような音が響く。

隆明は残った右耳のピアスを右手で外す。

銀色のループのピアスはおそらく純銀製だろう。お嬢様育ちの藍にしてみればそんなに高く感じないだろうが、普通の高校生の自分には十分高いモノだ。

捨てるのはもったいないが未練がましく持ち続けるものでもない。もう片方のピアスも拾い上げ、抜けた歯を投げるように高く後ろに放り投げる。

きらりと輝いてそれはどこかへと落ちていった。

「・・・って・・・」

隆明は殴られた頬をさすった。

「って！・・・予想外に痛いな。ま、自業自得だけどさ」
ぽたり、と制服に水滴が落ちる。

誰に対する言い訳か。

彼は膝を抱えながらひとりごちる。

「はは、情けねえ。痛すぎて涙が出てきたよ」

涙は、止まらなかった。

まるで堰を切ったように止めどなく流れて来る。拭っても、拭ってもそれは治まりそうに無かった。

冗談を言うように笑いながら言えることならどんなに楽だっただろう。

あのまま、時間が止まればどんなに楽だっただろうか。
それでも選んだことが正しかったと信じたい。

せめてこの選択が間違っていないと思ったかった。

空は皮肉なほどに晴れわたり、太陽は燦々と照りつけてくる。

少し強い春の風が、何故だか心地よかった。

1話 出会いで始まる物語

「失礼シマしたあー」

ぶつきらぼうに言い放って蒼井潤は生徒指導室を出た。

南陽高校に入学して二ヶ月が過ぎた。これが六度目の呼び出しになる潤に反省の色は微塵も感じない。教頭の話など最初から聞く耳のない彼には説教など右から左に抜けるようなもの。

今回彼が呼び出された理由は他校の生徒とのケンカ。5、6人を相手に激しい殴り合いをしたのだから、本来ならば停学処分を免れないところだ。

しかし、彼自身は少しじゃれ合っていただけだとしゃあしゃあと言つてのけ、相手方も彼にやられたと言うことを一言も言わなかったために説教だけで済んだのだ。幸いにもどちらも軽傷だったというのも一因だろう。

ただ、説教だけでお咎め無しの状態では反省する材料にもならない。

彼にしてみれば学校始まって以来の不良だと青筋を立てる教頭の横で、何故か苦笑いをかみ殺している様子の担任・東雲陽一郎のほうに気がかかっていた。

東雲は新任教師に見えるほど若々しい外見をしているが、実際は三十を超えた教師だ。穏和な性格と、そのルックスのおかげで女子に絶大な人気のある人だ。鼻肩するような性格ではないため、男子にも人気がある。

だが、潤はどうしても苦手な存在だった。

「その様子だと、何事も無かったようだね」

指導室を出ると、待ちかまえていた天野亜夜が潤の肩を叩いた。

潤は仏頂面で答える。

「何事も無くも無かったぞ。東雲の奴、にやにやしやがって。言いたいことあるならはっきり言えっつーの」

「なんだ、やっぱり何事も無かったんだ」

亜夜は吹き出すように言った。

彼は高校に入ってから知り合った友人だ。同じ「あ」から始まる苗字のために隣り合っただけの男、というのが第一印象だ。

女のような顔と名前をしている上、中学では生徒会長をやっていたと聞いて、いけ好かないタイプの男だと思っていたが、いざ話をしてみると気があった。どこか根性の座っている彼に潤は好感を持ち、亜夜の方もこの問題児に興味をもった。

優等生タイプの亜夜と問題児の潤。まるで正反対の二人だが、どこか通じるところがあったのだろう。出会ってまだ二ヶ月くらいだというのに、まるで幼い頃から一緒にいる親友のように二人は仲良くなった。

潤を不良だからと嫌煙する他のクラスメートたちと違って、彼が何をしていても気にする様子はない。時々からかい半分の嫌味を言われるが、おかげで潤も言いたいことが言える。何か不思議な奴だと思う。

「だから何も無くなかったんだって。どうせまたアイツに説教されるんだぜ、俺」

「潤はホント東雲先生に弱いよね。ケンカは強いのに」

「うるせえよ」

彼は口を尖らせてそっぽを向いた。

東雲に弱いのは否定できないし、笑えない。

ケンカが強いのも事実だ。因縁を付けられて初めて殴り合いをしたのは中学一年のこと。頭の中が沸騰するような感覚に襲われ、何も分からなくなった。気付くと足下に咳き込んでいる男が転がっていた。

幼い頃は身体が弱かったため格闘技を習うことはおろか、走り回ることすらあまり無かった。それなのにどうしてそんな才能があったのか今でも良く分からない。初めは自分がしたことだと信じられなかったくらいだ。

以来、彼が望む望まないは別にしてケンカに明け暮れる毎日となっていた。

高校に入ってケンカをふっかけられる機会も少なくなったが、名前も顔も知れているため因縁をつけてくる奴も多い。

よく進学校の南陽高校に入学できたものだ、と亜夜に笑われるほどに。

そのケンカが強い彼がどうして東雲のような教師が苦手なのか。

それは潤自身もよく分らないことだった。

どうも奴だけは似ても焼いても食えない気がするのだ。

「怖いとか、そう言う訳ではないんだよね？ 何で？」

「そんなん、俺が聞きてー・・・」

言い差して彼は視界の端に入った姿に目を見開いた。

全身が、ざわめいた。

視線が吸い寄せられるようにそちらを向いた。

受付で事務員と話をしている女。

黒髪を少し高い位置で結い上げている。

さらりとしたシルクを思わせる白い肌。

長い睫毛。

すらりとした印象の手足。

仄かに香る甘い匂い・・・。

呼吸をするのも忘れ、潤は彼女に魅入った。まるで熱いものを飲み込んだように胸が熱い。心臓が妙な音を立てて鳴り響く。逆流した全身のエネルギーが目からこぼれ落ちそうなほどに熱い。

「潤？」

怪訝そうな声に反応できない。

彼女から目を離せなかった。

視線に気が付いたのか、女が振り向く。

一瞬だけ、黒曜石のような瞳と視線が交わった。

彼女はそのまま視線を外し、再び事務員と話を始める。ただ振りに向いてみただけの一瞬。だが、彼にとってはとても長い時間のよう
に感じられた。

恋に落ちる、とはよく言ったものだ。

彼はその瞬間、まさに彼女に落ちたのだ。

奇跡か運命か。

問われたら、運命と答えると思う。

2話 再会は運命に複雑に絡み合う

「こちらでお待ち下さい」

対応してくれた事務員に言われ神田川藍はソファに腰を下ろした。父親の代理として訪れた学校は奇しくも母校だ。卒業から七年も経つがあまり変わらないように見える。

変わったとすれば教職員の顔ぶれだろう。

南陽の生徒達は進学校らしく頭の良い生徒が多いため校風も乱れた様子は見られない。先刻廊下で見た生徒の様に髪を茶色く染めている生徒もいるが、それもごく僅かであるし、藍が学生の頃にも一学年に一人か二人が存在した。

その茶髪組の一人とつき合っていた藍は、卒業間近に酷い振られ方をして落ち込んでいたが、さすがに七年も前の事だ。もう「そんなこともあったな」と思えるほど懐かしいことだった。

「お待たせして済みません、神田川教授の代理人の方ですよね？」
担当とおぼしき教師に声をかけられ藍は慌てて立ち上がってお辞儀をした。

「あ、はい。私、娘の・・・」

「藍ちゃん、だろう？ 知ってるよ」

「え？」

笑いを含んだ様な声。

顔を確かめて藍は目を見開いた。

「東雲・・・先生？」

「そうだよ、久しぶりだね」

東雲は口元に手を当てて答えた。

こうして少しからかったような笑い方をする時、口元に手を当てる癖がある。その仕草は紛れもなく彼のものだ。

「本当に・・・お久しぶりです。先生になられたんですね」

彼は藍の中学時代の家庭教師だ。

当時大学生だった彼は、藍の兄敏重の友人だった。頻繁に神田川家に入り込んでいた彼はいつしか彼女に勉強を教えるようになった。こうして訪れた先で再会したのには驚いたが、教員に鳴ったというのは納得がいく。彼は昔から教え方が上手かった。

「おかげさまで今は国語科の教師だよ。藍ちゃんは、随分と綺麗になったね」

さらりと言われ藍は顔を赤らめた。

二十五にもなって「藍ちゃん」と呼ばれるのも恥ずかしいし、普通の会話の中でいきなり褒められるのも照れる。

そう言えば東雲はこういう人だった。

最後にあったのは十年くらい前だからもう三十代になっているはずの彼は、まだ大学生と言っても十分通じそうな程に若々しい。

あの頃と変わらない様子に藍は微笑んだ。

東雲は藍に座るように促しながら問う。

「みんな変わりない？」

「父は相変わらず研究に没頭しています。おかげで私まで講習会の代理人をさせられているんですよ」

「あはは、教授らしいね。敏重は？」

先刻藍を案内してくれた事務員が二人分のお茶を持ってきた。それに札を言い、藍は首を傾けた。

「・・・あの、先生は兄とは連絡を？」

言いにくそうな彼女とは対照的に彼はあっさりと頷く。

「うん、卒業後も何度か会っているしね。その様子だと家には帰っていないみたいだね」

「はい。じゃあご存じなんですネ」

何をまでは言う必要はない。

彼は口に手を当てて頷く。

「親友だからね。そう、最近一度あったかな。半年ほどまえにこの生徒が失踪した事件があっただろう？ その関連で来ていたよ。さすがに普通の格好で来ていたけど」

「なんだ、じゃあ先生がここにいるって知っていたんだ」

「再会して妹と僕が良い関係になるのが嫌だったんだろう？ 彼は藍ちゃんが大好きだからね」

「お兄ちゃんらしい」

藍はくすりと笑った。

敏重は警察関連の仕事をしている。一度は警察を辞めたものの、なんだかんだ言いながら結局警察関連の仕事が続けているのだ。

去年起こった「毒虫」の事件や、同時期に起こった少女失踪事件にも深く関わったそうだが、悪いニュースに該当する事件を妹に詳しく話したくない様子で、事件のことを聞いても言葉を濁すばかりだった。

失踪した少女は南陽の生徒だった。

今はどうなったのか、そう言えば続報も未だ聞かない。

「でも良かったな」

「何がです？」

「神田川教授講習会の担当になっていて。知り合いだって話をしたら無理矢理責任者にさせられて正直気が重かったんだ。教授はアレだから」

自宅にまで出入りしていた東雲は教授の機嫌の悪い時の気性の荒さを知っている。講習会は月に五、六回頼まれるが、研究がうまくいっていないかったり無理に引っ張り出されたりして機嫌が悪いと滅茶苦茶になってしまうのだ。そのため、近しい人が代理人として壇上に立つのは良くある話だ。

その教授の相手をするとなれば確かに気は重くなるだろう。

藍は吹き出す。

「ご迷惑をおかけします」

「迷惑なんてないよ。藍ちゃんと仕事が出来るんだからね。今まで何度か講習会を？」

「はい、その辺は安心して下さい」

「その辺は？」

怪訝そうに首を傾げるかれに藍はにこりと笑う。

「兄が乱入したり、父が突然やると言い出しても責任は持てないって事です」

「なるほど、それは気を付けておかないと」

東雲は声を立てて笑った。

会うのが久しぶりなのに、彼はあまりそれを感じさせない。あの頃と変わらずからかわれたりするけれど、一緒にいて落ち着く人だ。ひよっとすると今の彼女は恋人と一緒にいる時よりもリラックスしているかもしれない。

「ところで、と東雲はお茶に口を付けながら言う。

「仕事の話の前に一ついいかな？」

「何ですか？」

「今晚、予定入ってる？」

彼女は瞬いた。

プライベートの話だと念を押した上での発言。これはどう考えてもデートの誘いだ。

慌てて彼女は言葉を探す。

「あの、私、今つき合っている人が」

「彼氏は、男友達と遊びに行くのも嫌う人？」

「そんな訳じゃ・・・ありませんけど」

「じゃあ、食事くらい良いだろう？ 予定が無ければだけどさ」
久しぶりに会った東雲と話をしたいのは確かだ。

彼は優しい人だし、何より紳士だ。滅多なことにはならないだろうが、それでも後ろめたさを覚えるのは恋人という存在があり、最近は少し上手く行っていないせいだ。

それに何より藍は東雲のことが嫌いじゃない。

藍は少し考え込んでから頷く。

やっぱり、久しぶりに会ったのだからもう少し話がしたい。

「はい、じゃあ食事くらいなら・・・」

にこり、と彼は笑う。

「良かった。じゃあ楽しい話は後で。．．．それじゃあ、神田川さん、講習会の話をしてよろしいですか？」
藍は居住まいを正してはいと頷いた。

3話 僕らは互いに求め合う

シャワーを浴び、女の匂いを洗い流した。

独特の香水の匂い。彼女の身体の匂いと混じり合い誘惑するように彼の身体にまわりつくのだ。

移り香は、熱い湯と石けんの香りだけでは残ってしまいそうで、

麻木安吾随分と長い時間浴びていた。

幸村奈保と安吾は恋人同士という訳ではない。

彼女には夫と子供があり、安吾には長年つき合っている恋人がいる。

それでも週に一回、こうして会うのはお互いに求めるものと同じだからだ。

嫌いな訳でも、特別好き会っている間柄でなくともこうした関係になるのは珍しくないことだと思う。ドラマや小説の中では良くある話だし、みんな友人知人にいれば多少驚くが無関係な人の話を聞けば昔のように驚いたりしないだろう。

性でさえ気軽に売り買いされる世の中だ。金銭の絡まない二人の関係は随分と健全なもののように見える。

日本というのは快楽に溺れ墮落しつつあるらしい。

「麻木くん」

幸村に呼ばれ安吾はシャワーを止めた。

ホテルの浴室の磨りガラスの向こう側にシルエットだけの彼女の姿が見える。

安吾はドアを開けた。

きや、と彼女は短く悲鳴を上げる。

彼は彼女の足下に置いてあるタオルを引っ張り込み、顔を拭いた。雪村が少し赤くなっているのが分かったが、安吾は気にしなかった。こういう関係になって一年ほどたつ。今更恥ずかしがることもない。

「どうした？」

安吾が尋ねると彼女は視線をそらせながら言う。

「これから私、研究室に戻らなくちゃいけないから先に出るわね」

「ああ・・・俺も後から行くから」

「うん、じゃあ、よろしくね」

彼女は安吾の所属する研究室の先輩だ。

安吾より十も年上なのだが、二人でいる時はむしろ年下のようにさえ見える。恋ではないけれど、好きだし、可愛い人だと思う。

二人きりになったとき、ついつい敬語を忘れるのはそのせいだろう。研究室では回りに悟られないようによそよそしい態度を取っているため、彼女は安吾の気安い態度が嬉しいらしい。

先に出る、と彼女は言ったけれど、一緒に出たことは今まで一度もない。

出るのも入るのも、わざと少し時間をずらしているのだ。お金さえちゃんと払えばいちいち詮索したりしない無人受付ならではのとだ。

安吾は身体を拭き終えて洋服に袖を通した。

がしゃん、と音を立ててクロスのペンダントが床に落ちる。

安吾は責め立てられた気がして、舌打ちをした。

それは恋人からの贈り物だ。バイク乗りの安吾に似合うようにとごつごつとしたペンダントを彼女が選んでくれたのだ。

彼女と上手く行かなくなり、別の女とこういう関係になっている今となっては重いだけの代物だ。

別に彼女が嫌いになったわけではない。

むしろ安吾の方が一方的に彼女のことを想っている。

ただ彼女の中にはつきあい始めた頃から変わらず別の男の存在があるのだ。それを承知でつきあい始めたのだから文句は言えないが、もう七年も経つ。そろそろきっぱりと忘れてくれない頃だ。

「・・・隆明のやつ」

かつて自分の親友だった男。

高校の卒業式間近に彼女を振って、そしてその数日後に行方不明になったまま、今どこにいても分らない。何故、何も言わず消えてしまったのかも分らない。謎と彼女の心に傷を残したまま彼はどこかへと消えた。

忘れた、といっている、時々彼女は寂しげな視線を遠くに向けてる。そして、隆明と同じように安吾も去ってしまうのではないかと怯えている。

その複雑な温度が二人の関係を徐々に蝕んでいた。

つき合っているというのは名ばかりで、今は月に数えるほどしか会っていない。

こんなにも、近くににいるのに心は酷く遠いところにいるように。

安吾は部屋を出て駐車場に向かった。

さすがに昼を少し過ぎたぐらいのこの時間にホテルを利用している者は少ない。

駐車スペースに堂々と止めてあるヤマハのDSは数年前に事故でTWを壊してから買い換えたものだ。TWに乗り慣れていたために随分と乗り心地が悪い気がしたが、今は結構気に入っている。

バイクに跨りフルフェイスのメットをかぶった。

ハンドルを握って走り出す時、いつも昔の事を思い出す。

高校の時、本当は禁止されていたけれど、バイクを乗り回して走り回った日々。隣にはいつも隆明の姿があって、その後ろには藍のすがたがある。

今考えれば「お嬢様」相手に何をしていたのかと思うけれど、あの時は楽しかった。

切ない片思いも悪くなかった。
でも今は違う。

親友だった男に憎しみさえ抱き、今は恋人になった藍に罪悪感を抱いている。

苦い思いを払拭させるように彼はバイクを加速させた。

バイクは街中を抜け、少し山に向かう道に入る。曲がりくねった

一本道はこの辺りのバイク乗りに知らない者はいない程の有名な道だ。

夜になれば速度を競い合うレースのようなものも開かれる。

そんな道に今は一人。

思い切り加速が出来る。

安吾は空気抵抗を押さえるために身を低くした。

刹那。

混じり合う自分のバイクの音とは違う音。

ミラーで確認する姿。

後から挑発するように追ってくるバイク。

(カワサキか・・・)

彼はスピードを上げた。

カワサキのバイクは隆明の愛馬だった。

だから好きじゃない。

負けたくなくて引き離そうと加速させる。

距離は広がらない。

むしろ徐々に狭まっていった。

相手はまるで直線を走ってきているかのように速い。

神速のバイクがだんだんと近付いてくる。

そして、並んだ。

安吾は乗っている人間を睨んだ。顔は見えないけれど、少年と思えるほど小柄な男。ハンドルを握る左手が、奇妙な形に組まれているのが見えた。

人差し指に、中指を絡ませた「Good Luck」の形。

それが軽く振り上げられる。

明かな、挑発。

(・・・っ！)

カワサキが追い抜いた。

安吾は加速を止める。

一気に差が付いてカワサキは先へ先へと走っていく。
追いかける気が起こらなかった。

安吾は路肩にバイクを止め、ヘルメットを脱いだ。

（あれは・・・）

あの挑発の仕方は知っている。

昔、見たお調子者で負けず嫌いの彼が良くやっていたことだ。

「・・・・あれは・・・・隆明？」

まさか。

まさか、あいつが、七年ぶりに戻ってきたとでも言うのだろうか。

4話 空の距離

バイクを降り、潤はヘルメットを外す。

蒸されて汗をかいた顔に当たる風は心地よかった。

山道を抜けた先にある高台の公園は街を一望できる高さにある。

山林を切り開いて作られたため、緩やかな傾斜がる。設けられた柵に寄りかかって空を見上げると何にも邪魔されることのない空を見渡す事ができる。近くには天文台もあり、夜には星空と夜景を見ることが出来る。

ここはこの辺りで一番空が綺麗に見える場所だと潤は思う。

エンジンを切って彼は柵の方に歩いていった。

雲一つ無い蒼穹があと三十分もすれば赤く染まり、やがて夜に変わる。

この時間の空が一番好きだった。

夜も朝も、潤には少し寂しすぎる。

潤は僅かに微笑んで景色を見つめた。生まれた時から住んでいた訳ではないが、ずっとこの場所で暮らしてきたような感覚に襲われるのは、今までの人生の中で一番重要な時間を過ごしてきたからだろう。

「・・・蒼井？」

不意に呼びかけられて潤は振り向いた。

「西久保に、葉山？ 何でこんなところにいるんだよ」

問うと西久保さくらは腰に手を当てて答える。

妙に偉そうな態度を取る彼女は中学の時のクラスメートだ。スポーツが得意そうで、快活な印象を与える彼女は高校まで一緒になった腐れ縁だ。一方彼女に隠れるようにしている葉山みどりは潤のクラスメートだ。大人しくて目立たない感じだったが、西久保と一緒にいることが多かったので何となく覚えた。

「何で、はこっちのセリフよ。何してるの？ こんなところで・・・」

・っていうか、アンタバイクの免許・・・」

「うるせえよ。空を見に来たんだよ、悪いか」

「空を？」

彼女はきょんとして葉山の方を向いた。

そしてぷつと吹き出す。

「似・合・わ・な・い。何そのジョーク。最高に面白いんだけど？」
「・・・さくらちゃん」

困惑するように葉山は二人を交互に見た。

潤はむつと頬を膨らます。

「いいだろ、俺がどんな趣味もってたって」

「趣味？　へえ、ケンカ以外にあったんだ」

「ケンカは趣味じゃねえよ」

向こうに行け、と言わんばかりに彼はそっぽを向く。

この程度でからかうのを止めるような女なら苦労はしない。

にやり、と笑った西久保は潤に近づき顔を覗き込む。

「ねえ、そんなに好きならさ、今日、私たちと天体観測しない？」

天文部の観測会があるのよ」

潤は嫌そうな顔をした。

西久保がこう誘うのにはきつと何か裏がある。つきあいが長いだけにこの微笑の意味を悟った彼は即座に拒否する。

「嫌だ。どうせ男手が足りないから手伝えとかいう魂胆だろう」

「分かっているなら話は早いわ。あのバイク、アンタのじゃないでしょ」

悪びれもせず頷いた彼女はちらりと潤のバイクの方を見た。

あのバイクは最近先輩に「出世払い」で譲ってもらったものだ。

中古品だが管理していた人がバイク好きだったために随分と性能はいい。もちろん潤は未成年の上に免許を持っていない。名義人は先輩のままだ。潤が事故を起こせば迷惑は確実に先輩のところまで及んでしまう。

潤は彼女の意図するところに気付き青ざめた。

「お前な・・・！」

「いやあね、どうこうするつもりなんかないわよ。ま、口が滑らない自信は無いけど」

つまりはこういう事だ。

天体観測の手伝いをしなければ、このバイクのことを教師にばらす、と脅しているのだ。

世話になったバイクの持ち主に迷惑をかけたくないという彼の性格を知った上での行動だ。

「くそっ・・・よく悪知恵が働くよ」

「処世術って言ってよ。で、手伝ってくれるの？」

「・・・ああ」

不本意だがそうする他はない。

仕方なく頷くと彼女は喜々として天文台の方に駆け出す。

「先生に一人増えたって言ってくるわ！ アンタ今のうちにバイク隠しておきなさいよ。みどりは逃げないように見張って！」

「あ、さくらちゃん・・・！」

葉山は戸惑った声を上げる。

それは当然だろう。

潤と葉山はクラスメートとはいえ、話したことは皆無と言っていい。優等生タイプの葉山と潤とでは随分と違う。亜夜は男だったから話をしたが、彼女とは全く接点がなかったそれに亜夜とは違い、葉山は悪評ばかり聞く潤に対して怯えている様子だ。

二人きりにされて戸惑わない訳がない。

潤は居心地が悪そうに頭を掻いた。

彼女の方がずっと居心地悪いだろう。何か話しかけようとしている様子だが、うつむいたまま何も言い出せずにいる。

仕方なく彼は問いかけた。

「お前、あいつといて疲れねえ？」

「あ、ううん。さくらちゃん優しいし、私、こんなだから、元気分けてもらっている感じで」

「ああ、なるほどな。二人を足して割ったらちょうど良くなりそう
だ」

「・・・」

うつむいた彼女を見て失言に気付く。

別に潤は嫌味のつもりで言ったわけではない。

慌てて取り繕った。ここで葉山に泣かれたら、後で西久保にどんな報復をされるか分かったものではない。

「まあ、葉山はそのまんまの方がいいだろうな。アイツみたいにうるさいのが増えたら俺がもたねえし」

「・・・仲いいね。昔つき合ってたりとか、したの？」

「俺とアイツが？ 冗談じゃねえ」

百歩譲って友達になることはあったとしても、男女の関係になることはない女だ。色気のある話になったことすらない。

ただ、グループの中で恋愛ごとに話が及んだことは一度だけ会った。その時潤は色恋沙汰に興味がなく、西久保の方はというと「いつか会おう運命の人を待っているのだ」と少女漫画みたいなことを言っていた。

はつきり言って運命とか口にする人間とは恋愛観が違いすぎるのだ。

そこまで考えて潤は今日学校で見かけた女の人のことを思い出した。

見た瞬間、運命がやって来たと思った。

潤は小さく笑う。

どうやら潤は西久保と同じ病気にかかってしまったようだ。

「・・・蒼井くん？ どうしたの？」

空を見上げたまま、少しぼうつとしていたようだ。

心配して覗き込んだ葉山に潤は首を振って答える。

「何でもねーよ。ただ、ちょっと空が近いな、って思っ」

「この辺りで一番空が綺麗に見える場所だからね」

潤は彼女を見つめた。

「そう、思う？」

「うん、天文所があるから言う訳じゃないけど、私、ここの景色好きなの」

にこり、と笑う葉山は名前の通り透き通った山々の緑のように見えた。

同級生の女の子を綺麗だと思ったのは初めてかもしれない。

あのひとのように心が剥がれそうな切ない感覚は無いけれど、彼女はまた違った感情を覚える。

あえて言葉にするならそれは「安らぎ」。

もし今日あのひとに出会っていなければこれが恋だと勘違いしたかもしれない。

でも、これは恋じゃない。

潤は彼女に微笑み返し、再び空を見上げた。

済んだ青空はどこまでも続いている。

街中にいる時よりも、少しだけ空が近い。

5話 想い人は、近くて遠い

「へえ、じゃあ彼氏は考古学の勉強を？」

東雲は鶏肉をナイフで切りながら言う。

街中にある落ち着いた感じのイタリアンの店は、藍も時々友人達と食事に来ることのある店だった。もっとも、藍が来るのは昼の時間帯が多いため同じ店でも夜は違った雰囲気を楽しめる。

夜はコース料理がメインになった店内には、デートをしているカップルが多くいる。バックにはピアノの生演奏が流れていた。

「はい。現地の人と話ながら進める研究がおおいせいで休みがあまり会わないんです」

「酷い彼氏だね。こんな可愛い彼女を放って研究なんて」

東雲の言葉に藍は慌てて弁解する。

「あ・・・いえ、私も承知でつき合っているし、それに、私の方にも悪いところがあるから」

「うん？」

首を傾げられ、藍は首を振って話題を変えようとする。

こんな事は再会して間もない東雲に相談するようなことでもない。

「あ、何でもないんです。それより先生はお付き合いしている方いいんですか？」

彼は肩をすくめた。

「残念ながら、ね。好きな子ならいるけど」

「そうなんですか？」

「うん、藍ちゃんのことが好きだよ」

言われて、赤面しかけるが、からかわれているんだとすぐに思い至った。

藍は微笑んで答えた。

「私も東雲先生のこと、好きですよ」

「大人な対応ありがとう」

東雲は笑って食事を進めた。

神田川という家に生まれたため、礼儀作法は一通り教え込まれた。そのため、人とうとういった場所で食事をする時その手元について目がいつてしまう。

綺麗な食べ方をする、と思った。

以前安吾とこういう店に行った時、不慣れで不格好な食べ方をしていた。彼はナイフやフォークでする食事は好きではないようだったし、それから食事をしに行く時は居酒屋やファミレスのような場所を選ぶようになった。

今回は東雲の方から「良い店がある」と誘われた場所だ。

久しぶりに来ると話していたために、自分に合わせてくれたのだと思ったが、その食べ慣れた様子から、彼自身が本当にいいと思った店だとわかりほっとする。

住む世界が違う。

そう言われるのが怖くて安吾とのつきあいは少し無理をしている。だから、こんな風に自分も相手も無理をせず過ごせる時間が嬉しかった。多分、ずっとこういうところでデートとかしたかったのだろう。

長いつきあいなのに、そんなことも言えないなんて。

臆病になっている自分が悲しい。

東雲との食事は楽しい時間だった。

安吾のことを尋ねられ答えに窮することはあっても、久しぶりにリラックスした時間を過ごした。

比べる相手が違うと分かっているつもり、安吾と比べてしまう。

東雲は外見こそ同年代に見えるが、大人な人だ。

気遣いも優しい。

わがままでも笑って許してくれそうな包容力のある人。

どうして自分はこういう人を好きにならなかったのだろう。どうして安吾とずっとつきあい続けているのだろう。

別に安吾が嫌いな訳ではない。

(でも、好き?)

問われればきつと即答できない。

感情だけで恋愛してきた学生の頃とは違う。ただどうしようもないくらい「好き」という感情だけでつき合っている訳ではない。だから好きかどうかを問われると一番困る。

嫌いな訳じゃないのに。

本当に、嫌いな訳じゃないのに。

「今日は、ごちそうさまでした」

東雲の車で自宅前まで送られて、彼女は少し名残惜しい気持ちで礼を言った。

「いや、こっちこそ、楽しい時間をありがとう。・・・また、誘ってもいいかな?」

昼の時のように迷いも罪悪感もなかった。

藍はこくりと頷く。

「はい、ぜひお願いします」

「うん。また連絡するね。それじゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい」

走り去る車を見送って、藍は携帯電話で時間を確かめた。

時間はまだ十時を回った頃だ。

高級住宅街でもあるこの辺りはもう静まりかえっている。

藍は玄関の柵にもたれかかって夜空を見上げる。

まだ少し、家には帰りたくない気分だった。

仕事以外で父親と顔を合わせたくなかった。この時間はまだ書斎の方にいるだろう。

藍が帰ってこなくても何にも言わないような人だが、顔を合わせれば何かを言い出すに決まっている。

気むずかしい人。

だから、母親にも逃げられるのだ。

藍は微かに笑う。

見上げた夜空は澄んで綺麗だ。

久しぶりに星でも見に行こう。

（天文台、空いているかな）

あらかじめ予約をしていないと解放されないが、先客がいたり、館長がまだ残っていれば飛び込みで入ることも出来る。

藍は携帯電話で天文台の方へ電話をかけた。

今日みたいな日に、天文台が開いていないわけがない。

星を見つめる彼女の目に、まだ運命は映っていなかった。

そしてこの一本の電話が、未来と過去に繋がるものになることに、彼女は気付くはずも無かった。

6話 運命はそうして回り出す

ドラマや映画の影響で時々人気は再燃するものの、大きな天体ショーでもない限り、天文台は静かな場所だ。この館長は本当に星が好きな人だから、晴れて天体観測が出来る日は開けているものの、基本的には閉館している事が多い。

今日は絶好の観測日和だった事に加え、近くの高校の天文部が合宿をしていることもあって天文台は開かれていた。

「久しぶりね、神田川さん」

館長の瀬能は以前来た時と変わらない様子で藍を出迎えてくれた。もう七十歳に近いくらいの年齢の人だが、星の知識は人一倍ある。女性館長という珍しい肩書きを持っている彼女は、藍がここに入りまする以前からここに勤めている。小柄で背筋のぴんと伸びた人だ。つつたようなメガネをかけているため厳しい印象をうけるが、穏和で物腰の柔らかい人だ。

「こんばんは。いきなり電話してすみません」

「いいのよ、一人でも多く来てくれると私も嬉しいから」

そう言って微笑んだ瀬能は少し悲しそうに見えた。

引退の話でも出ているのだろうか。

問おうとすると、彼女は話題を変えた。

「今日にはぎやかでしょう？ 貴女の後輩がきているのよ」

「それじゃあ、南陽高校の？」

「懐かしいでしょう、貴女もあんな感じだったわ」

藍は曖昧に笑った。

高校の時、良く天文台に来ていた。その時瀬能と親しくなったのだが、こうして突然昔話をされると奇妙な気分になる。

七年以上前のこと。

後輩といってもさすがに知っている人はいない。今時の高校生という感じで印象も多少違う。それでも瀬能から見ればいつの時代の

高校生も同じように映っているのだ。

(似ている、って思われても仕方ないか)

昼に学校を訪れた時、自分も同じような感想を抱いていた事を思い出し苦笑する。

似ている、といわれて奇妙な感じがするのは、自分たちだけが特別って思いたいところがあるからだろう。客観的に見れば高校生の時の自分も、今の高校生もあまり変わらないのかも知れない。

「お相手出来なくてごめんなさいね。何か分からないこと会ったら声をかけてちょうだい」

「はい、勝手に触らせてもらいますね」

瀬能は天文部の方の講師を頼まれているのだ。

それを承知で来ているのだから、藍に瀬能を責めるつもりなどない。どうせ勝手知っている場所だ。自由に見てもいいという許可をもらったことだから、ゆっくりと観測することにしよう。

藍は二階に上がる階段の方へ歩いていく。

半球体になった二階部分では小さな望遠鏡がいくつもあつた。高校生達は大望遠鏡のほうを先に使うようだからそちをまず使わせてもらうことにする。

どっちにしても、天文部員が全員集まったとしてもそんなに人数がいらないため、沢山あるものの一つを使ってもそれほど支障はない。

「つつわ！ 冷てえー！ 何すんだよ！」

二階に上がる階段の下は飲料ディスプレイがある。

そこにたむろした高校生の一人が突然声をあげた。

どうやら仲間の女の子にジュースをひっかけられたらしい。女の子は笑いながら手を合わせた。怒っている男の子とは対照的だ。

「あはは、ごめーん」

「笑い事じゃねーよ。ハンカチ出せ！」

「あ、忘れた」

「お前、それでも女か！ ……あああ！ 俺の革ジャンが！」

茶髪の男の子は上着に付いた水を慌てて払いのける。

革製品に水分は大敵だ。

藍はくすり、と笑って男の子にハンカチを差し出した。

「良かったら使って」

「え・・・？」

男の子が驚いたように顔を上げる。

目が大きいため、高校生の男の子にしては少し幼く見えるような外見。整った顔立ちはジャニーズ系アイドルにでもいそうな感じた。染められた髪と、右耳に光るピアス。

少し不良っぽくて、今時の格好良い感じの男の子。

女の子に結構人気のあるような子だろう。

十歳近く年上の藍にしてみれば、可愛いようにさえ見えるがそれを口に出せば失礼になるだろう。

彼は突然声をかけられたのによほど驚いたのか硬直したまま藍を見つめていた。

「・・・？」

首を傾げると、はっとしたように女の子が声をあげる。

「すみません！　ありがとうございます！　蒼井ったら、何見とれてんのよ」

「ばっ・・・見とれてなんか」

赤くなった彼は女の子からハンカチを取り上げて自分で拭いていく。

藍は小さく笑った。

恋人同士だろうか。

見えていて微笑ましい。

「仲が良いのね」

「あっ・・・ハンカチ」

「あげるわ」

ジュースの染みこんだハンカチを返されても持って帰るのが大変なだけだ。

藍は微笑んで二階へと上がっていく。
お礼を言う女の子の快活な声が後から着いてきた。

※ ※ ※

彼女が二階へ上がっていったのを見て潤はその場にへたり込んだ。
まさか、学校で見たあの人に同じ日のうちにもう一度会えるとは思
っていなかった。

ピアノを奏でるような綺麗な声。透き通ってガラスのようだった。
きつすぎない優しく香る甘い香水の匂い。

「何？ 一目惚れ？」

からかうように西久保が言う。

「そんなんじゃない？」

ない、と言いかけて自分が赤面していることに気が付く。
頬が熱い。

心臓が破裂しそうだ。

西久保はしゃがみ込んで潤と視線を合わせる。

「おにーさん、マジですかい？」

「う、うるせー」

言葉を真面目に返せなかった潤。

彼女はにやにやと笑いながら言う。

「へえ・・・良かったね、チャンスよ」

「チャンス？」

「ハンカチ返すからとか適当に理由つけて電話番号とか聞き出すの
！ メルアドくらいだったなら結構簡単に聞き出せるものだよ」

「そんなこと・・・出来るわけないだろ？」

「何を臆病なこと言ってるの？ 私、戻るから上手くやるのよ」
ぽんぽんと肩を叩かれ潤は彼女を睨む。

他人事だと思って簡単に言ってくれる。

彼女は何故だか上機嫌でスキップをしながら奥の大望遠鏡のある部屋へと進んでいく。どうせ潤をからかうネタが一つ増えたか思っているのだろう。

潤は溜息をついた。

どうやら知られたくない人に、知られたくないことを知られてしまったようだ。

7話 夜の青はいつの思い出

『藍、ちょっと南西の空見ていて。

あと十秒くらいで流れ星が流れるから』

『な？ 言った通りだろ？』

天体観測をしているとつい時間を忘れてしまう。

藍は携帯電話を見て時間を思いだした。

いくらいなくても気にされないとはいえそろそろ帰った方がいいだろう。この時間からタクシーが捕まるだろうか。

「・・・圏外」

時代が進歩して携帯がどんなに便利になっても、やはり電波の届かない死角は存在するのだ。特に、こんな高台の建物の中ともなると仕方ないだろう。

藍は館内でタクシーを呼ぶのを諦めて建物から外に出た。

一瞬、瀬能に一度挨拶をするべきか迷ったが、観測中にこんなことで邪魔をしたくない。また来て声をかければ良いだけのことだ。

天文台から外に出ると少し冷え込んでいた。

身体をさすりながら藍は携帯を見る。

まだ圏外だ。

公園の方なら電波も入るだろう。だめなら公衆電話を使えばいい。昔、まだ藍が隆明とつき合っていた頃、この公園に来たことがあった。

彼はここから見える空が一番綺麗だから藍と一緒に見たかったの

だと言った。そこで、流れ星を見た。

あの時藍は何を願っただろうか。

隆明とずっと一緒にいれるように？

いや、違う。

彼に関連したことだったが、もっと別のことを祈ったはずだ。

もう遠い昔のことですっかり忘れてしまったけれど。

「姉さん、今帰り？」

声をかけられ彼女はどきっとした。

こんな時間にこんなところに知り合いがいるわけがない。

振り返ると、電灯の明かりに照らされて先刻の高校生が立っていた。革ジャンを着てバイクに跨っている。

「ええ、そうなんだけど、電波が入らなくて」

「街までだろ？ 送っていいこうか？」

少年はにこりと笑う。

相手は高校生だ。けれどこのご時世、高校生だろうが中学生だろうが簡単に犯罪者になるような時代。安心して乗っていいこうという気にはなれない。

「ひょっとして無免許だからとか考えてる？」

「え？ ああ・・・そういえば高校生でしょう？」

原付のバイクならとれない訳ではないが、彼が乗っているのは大型二輪に分類される。高校生の時点ではとれないのでは無かっただろうか。

「あはは、だけど、並の人間より技術はあるよ？ 藍さんを振り落とすなんてことしないから」

「・・・何で名前知っているの？」

「館長さんから聞いたー」

彼は間延びした声で言う。

何故だか、ドキドキとした。

知っている。

どこかで覚えている。

この人。

懐かしくて泣いてしまいそうな人。

誰だろう。

本当にこの人の事を知っている気がする。

「ね、どうする？ 乗っていかない？ ハンカチのお礼」

きらりと彼の耳元で銀のピアスが光った。

ループのピアス。

（・・・ああ、隆明に似ているんだわ）

ただ、遊んだだけだと言った人。本気じゃなかった、安吾に対する嫌がらせだけで自分とつき合っていたと、淡々とやって自分を振った人。

あの日、酷い事を沢山言われた。

それでも嫌いになれなかった。

卒業式にも出ないでいなくなってしまった人。

今、どこで何をしているのか。

生きているのか。

それすらも分からないあの人に、この少年はよく似ている。年齢も、容姿も違うというのに、その雰囲気やしやべり方、仕草までもが似ている気がする。

「それじゃあ、お願いしようかな」

「了解♪ じゃあ、後ろに乗って。ああ。寒いからこれ着なよ」

彼はごく自然な風に革ジャンを藍の肩に乗せた。

「あなたは？」

「俺は藍さん乗せると思ったら興奮して暑いくらい似ている。」

この言い方も。

「それじゃあ、遠慮無く」

藍は笑って革ジャンを着てバイクの後ろに乗った。

彼は小柄な方だが、さすがに男物の服は丈も肩も余る。

「マフラー、熱くなるから気を付けて」

「うん」

「しっかりつかまってね」

藍は答える代わりに背中から手を回して抱きついた。
意外と筋肉質だった。

背格好の割に広くたくましい身体。暖かくて独特な男の人の匂いのする不思議な感じの背中。小柄で可愛い印象の彼だけれど、やっぱり男なのだと感じた。

藍は自分の顔が赤くなるのを感じた。
後ろで良かった。暗がりでもよかった。

不意に、あ、と彼が声を上げる。

赤面しているのがバレたかと思い、藍は身を固くした。
しかし、彼は気付かない様子で遠くを指差す。

「ね、藍さんちよつと向こう側見てて」

「え？」

言われた方向を見ると、すうっと、星が流れる。

「流れ星、見られたね。きつといいことあるよ」

「どうして・・・」

「俺の勘って結構当たるんだ」

彼はエンジンをふかしてバイクを動かした。

どうして、彼は同じ事を言うのだろうか。

どうして、星の流れるタイミングが分かったのだろうか。

彼は誰？

隆明とどういう関係がある？

どうして今頃になって自分の前に姿を現したのだろうか。

(・・・どうして)

どうしてこんなに胸が苦しいのだろうか。

8話 誰のための想い

「潤にしては随分と大胆なことしたんだね」

亜夜に言われ潤は頭を抱えた。

暖かい日差しが照る珈琲屋のカフェテラス。今日は学校がないため、亜夜も潤も私服姿だ。本当は明日学校で相談すれば良かったのだろうが二日の休みを待てずに日曜の朝から呼び出した。

昨日は一人で悶々として何もやる気が起きなかった。

こんな恋愛をしたのは初めての潤にはどうしていいのか分からなかったのだ。

どうしようもなく好きになった人をバイクに乗せて走るなんて滅多に出来ることではないし、幸せな時間だった。

けれど、それが夢であるように思えて仕方ない。

あの時の潤は、潤であって潤ではなかったのだ。

「家まで送ったなら場所知っているんでしょ？ ハンカチ返しがてら行ってみたら？」

「だけど、ストーカーって思われたらショックじゃーん。それに、俺興奮していたからよく覚えてねーんだよ、家の場所」

そう、よく覚えていない。

おとといの晩、潤は確かに彼女を家まで送った。

なのに、どうしてだか家の場所がよく思い出せないのだ。

幻ではなかったのかと不安になってくる。

「本当に好きになったんだね」

「うるせーよ。なあ、このハンカチ本当に存在してるか？ 俺だけが見えている幻じゃねーよな？」

潤は彼女のハンカチを出す。

洗濯した。

アイロンをかけて綺麗にした。

それでも彼女を思うあまり見ている幻覚でないとは言いきれない。

亜夜はハンカチを受け取って小さく吹き出した。

「大丈夫、俺にも見えてるよ。へえ、YAMAZAKIのハンカチだ」

「ヤマザキ？」

「最近結構人気のブランドだよ。プラダほど有名でもないけどね」

「ブランド・・・高いのか？」

「ハンカチだからそれほどでもないよ。七百か・・・千円くらい？」

「一枚で！？」　　「つか、何でお前そんなこと知っているんだ？」

亜夜はハンカチを戻しながら自嘲するように笑う。

「ホワイトデーの時ちょっとね。誰かからもらったか、そうでなかったら彼女お金持ちかもしれないよ」

「関係ねーよ」

潤はむっとしてハンカチを奪い返す。

金持ちだから好きになった訳じゃない。家が金持ちか否かなどその人の人格に関係のないことだ。ただ環境がそうだと言うだけで、そんなことで潤の気持ちが揺らいだりはしない。

相手がお金持ちだと色々大変なこともあるだろう。

大体趣味や好みだって違うだろうし、つき合うとなればお互いに無理をすることになる。別の環境で育ったのだから譲歩や妥協もあるだろうし、意見の食い違いでケンカもあるだろう。けれどそんなのはどこの誰とつき合ったって同じ事だ。

「だけど潤、その人のこと何も知らないんでしょう？」

「何だよお前、反対してんのかよ」

「俺は賛成だよ。人が人を好きになるって自由だし、良いことだと思う。だけど、」

そこで彼は言葉を切った。

「だけど、と言ったことを後悔したような表情だった。カフェラテを口に運んで小さく首を振る。」

「・・・いや、ごめん、何でもない」

「言いかけて止めるなよ。気持ち悪い奴」

潤は彼を睨んだ。

紙のコップを置いて亜夜は見返す。

「・・・、なら言うけど、本当に潤なの？」

「は？」

「その人のことを好きになったの、本当に潤なの？」

男にしては大きい瞳が潤を見つめる。

それが女性的という印象を受けないのは、奥に何か射抜くような鋭い気配が混じっているからだ。

潤は覚えず唾を飲み込んだ。

不特定多数の人間と殴り合いのケンカを何度もした潤には分かる。彼の瞳は殺意にも似た闘志。ケンカを仕掛けて来ておいて、負けを悟るとなると尻尾を巻いて逃げ出す連中とは違う。

人を殺す覚悟のある人間の眼。

それは潤に対してではなく、見えない「何か」に対して向けられている意思。

誰かに対しての怒り。それとも憎悪だろうか。

友人の中に潜む狂気を目の当たりにしてぞっとする。

彼は慌てて言葉を探した。

「な、怖いこと言ってるんだよ。まるで俺が俺じゃないみたいな言い方」

「潤自信の意思で彼女が好きなら何の問題もないよ」

そう言った亜夜の目はいつもの穏やかなものに戻っている。

あの一瞬の鋭いものは何だったのだろうか。

何が、彼にその表情をさせたのだろうか。

潤は何故か居心地が悪くなって視線を逸らした。

逸らした先に見える人。

反射的に立ち上がった。

「潤？」

「藍さんだ」

「え？」

潤の視線を追うように、亜夜の瞳もそちらを向く。

道を挟んで向こう側の駐輪スペースの隣に、彼女は立っていた。男と一緒にだった。藍と同じくらいの年齢だろう。自分に比べて随分と大人の印象を受ける。

親しい間柄を思わせるような距離で会話しているものの、彼女の表情はどこか暗く見える。男も好意的な話をしているようには見えなかった。

「何か、もめているみたいだね」

亜夜が言う。

彼は無意識で車道を突っ切った。途中、怒ったようなクラクションが響くが彼の耳には届いていない。亜夜の声も彼には届かなかった。

その瞳には藍と、その脇に立つ男しか見えていない。

どこか陰のある顔つきの男。学生の頃は潤のようなバカをやって来たタイプの人間だろう。匂いで分かる。

クラクションに驚いて二人が潤を見る。

潤は満面の笑顔で藍に手を振った。

「こんにちは、この間はどうも！」

「あ・・・」

「・・・何だお前は」

男は潤のことを睨む。

恋人だろうか。

どう考えても関係は良好のようには見えない。

潤はへらり、と笑って見せた。

9話 届かないのは想い

アオイ、と呼ばれていただろうか。

そう言えば名前を聞いていない。

藍は突然割り込んできた少年を見る。道の向こう側で連れらしい少年が慌てているのが見えた。

「蒼井潤」

彼は名を名乗る。

アオイという名前は苗字だったのか。

「おととい天文台でお姉さんにお世話になってき、ハンカチ借りたんだ」

へらり、と笑った少年は、安吾を怖がっているようには見えなかった。

安吾は巨漢という訳ではないが、鍛えているために体つきが大きく見える。昔、無茶をやっていただけあって睨めばほとんどの人間が怯えるのだ。

今まで藍をナンパしてきた男をそれで追い払ってきた彼を見ているだけに、少年の笑顔は奇妙にさえ見えた。

怖がるどころか逆に挑発するような顔。

バイクを乗り回していたところといい、飄々とした態度といい、おそらく彼も昔の安吾のような生活をしているのだろう。そうでなければよほど危機感というものがない人間なのだ。

「借りたのはいいいけどさ、住所とか知らないし、どうやって返そうかって考えていたところなんだよな。ちょうど会えて良かった。お姉さんこれから暇？　ハンカチ家に取りに戻りたいんだけど」

やや早口気味で言われ藍は瞬いた。

彼は、自分たちの険悪な様子を見かねて助け船を出してくれているのだろうか。

「おい、お前・・・」

「あれ？ お姉さんの恋人？ 俺、デート中に邪魔した？」

「そんなこと、ないわ」

安吾の方を見ないようにして藍は笑う。

よかった、と少年も笑う。

やはり、隆明に似ている。

安吾は彼のこと、どう思うのだろう。

「まだ話は終わっていない。藍、お前が天文台に行ったなんて一言も・・・」

「止めて」

ぴしゃり、と言い放つ。

自分の行動を逐一安吾に知らせなくてはいけないのだろうか。彼以外の男と喋ってもいけないのだろうか。

普段はメールを送ってもなかなか返してこないのに、こんな時だけこんな風にするなんてイライラする。

「この間の事は私も悪いところはあったわ。だけど、高校生にまでヤキモチ焼くのは止めて」

凶星だったのだろうか。

彼がぐつと言葉に詰まったのが分かる。

藍は視線を逸らす。

こんな事をしたいわけじゃない。彼を追いつめたいわけじゃない。ただもう少し、関係を修復したかっただけのこと。

「・・・お互いに頭を冷やしてから話し合いましょう」

うつむいたところに、道の向こう側で慌てていたもう一人の少年が、横断歩道を渡って追いついてきた。

ぱっと表情を明るくさせて藍は笑う。

「ごめんなさい、変なところ見せて。お詫びに何かおごるわ、昨日のお礼も兼ねて」

少年がにとわらう。

「うわぁ、ラッキーだなー」

気配で、彼がそっと手を伸ばしたのが分かった。

後ろから伸ばされかけた手が、宙を掴んだ。
その手は藍に届かず、そのまま下に降りる。
お願い。

もう一度その手を伸ばして引き止めて。
せめてもう一言だけ何か言って。

振り向けるような一言を。

自信になる言葉を。

電話する、それだけでもいい。

何か言って。

(安吾)

手は、伸ばされなかった。

声もかけられなかった。

待っていた一瞬が無くて、藍は彼を振り返った。

表情の読めない背中がそこにある。

(ずるいわ、私)

彼女は目を瞑った。

繋がっている確信が欲しくて、こんな駆け引きをするなんて、ずるい。

「良かったの？」

蒼井が問いかける。

藍は首を横に傾ける。

「何のこと？ それより何か食べたいものある？ ええっと、あなたも」

ちらりと、見ると黒髪の少年が笑った。

どこかで見たことのある顔だ。

外見は女の子とも見えるような柔らかい印象の少年だったが、幼いという印象はない。何か色々と経験してきたのだろう。少し悟ったような大人びた少年だ。

蒼井と彼はどこか似ている。

「俺はいいです、これから用があるんで。それより彼沢山食べるか

ら気を付けた方がいいですよ」

「余計な事言うなよ」

彼は赤くなつて友人を睨む。

それは隆明に似た少年ではなく、普通の高校生の顔。

あの日の彼とは別の人に見えて藍は少し首を傾げた。

夜で、自分がセンチメンタルになつていたからだろう。大体重ねて見て、違うからというのは彼に対して失礼なことだ。

「あはは、それじゃあ潤・・・またね」

彼は蒼井の耳元で何やら囁いてそのまま別の方向へ走っていく。

「ざけんな、余計なお世話だ！」

去っていく少年に悪態をついて、蒼井はぶすつとした。

藍は小さく吹き出した。

「笑うことないだろ」

「あ、ごめんなさい」

慌てて口元を押さえると、怒っている様子だった彼はへらりと笑顔に変わる。

どきつとした。

やっぱり似ている。

彼に。

この笑い方は隆明が良くしていた笑い方。

眉を少し下げて顔全体で笑う独特な笑い方。

何かを誤魔化す時、自分の思いを隠す時、人を元気づけようと氣遣っている時、彼は良くこういう笑い方をしたのだ。

覚えている。

七年前のことだけど、彼はこの顔で自分に別れを告げたのだ。

『悪かったね、俺、こんなんで』

悪びれもしない口調。

でも、何かを誤魔化すように笑っていた。

『安吾に嫌がらせしたかったただだよ、藍のことは何とも思っていなかったから、安心して・・・ってお前にしてみればそっちの方が

つらいよな?』

からからと笑う声。

酷い人、そう思った。

嫌いになれなかった。

そして今も。

「藍さん?」

安吾とつき合いながらも忘れたことは無かった。そのくせ、安吾が去っていくのを怖がって結局上手くない。

こんな想い届くわけがない。

隆明が帰ってこない限り、隆明にも、安吾にも。

10話 闇の中に沈むように

机の上で、携帯電話が音もなく光り始める。

暗がりの中で光る青のランプは寒々しく見えた。

恋人からの着信だと分かったが、出る気にはなれなかった。もう、何件もメールが入っていたが無視を続けていた。

彼女は自分のことを嫌っただろう。

どうせ出たところで別れ話しかない。

ヤキモチ焼きで臆病な自分を彼女が好きでいるわけがない。

ずっとほったらかしにしていたくせに、彼女が他の男と会っていただけで苛立って彼女にあたって傷つけた。

彼女が男と食事をしていたのは人伝に聞いたことだ。彼女は中学の時の家庭教師で兄の友人だと言ったが、そうと分かっててもどうしても割り切れなかった。

自信がない。

彼女が自分を好きでいてくれる自信がない。

だから他の男と楽しく食事をしていたと聞いて嫉妬せずにはいられなかった。

あの時、どこかの高校生と彼女がどこかに行くと言い出した時、何か言えば良かったと後悔をした。

彼女が、自分の言葉を待っていたのは知っている。

ごめん、の一言でも良かったのだ。

その一言さえ言っていれば安吾だって彼女からの着信にすぐ出ることが出来た。何日もずっと彼女との接触を拒否し続けることもなかった。

あの時の彼女に苛立っていたのもある。

どうして他の男ばかり見ているのか。どうして天文台に言ったことを黙っていたのか。どうしてあんな駆け引きみたいな行動をとったのか。

苛立って、意地張って、彼女に何も声をかけなかった。
だけど、本当はそうじゃない。

男の目をしたあの高校生に余裕の無いところを見せるのが癪だった。自分の方が好きだという弱味を彼女に見せるのが嫌だった。

責めるくせに、自分が浮気をしている。

それが後ろめたかったのだ。

携帯の光が消えた。

（どうしたらいい？）

藍のことが好きだ。

だけど、自分は他の男ばかり見つめている彼女を受け止めることが出来ない。そしてそんな感情が彼女を傷つけた。

（俺は・・・どうしたらいい？）

答えは、返らない。

どこからも。

※ ※ ※ ※

携帯電話の着信は無かった。

彼女から着信することはない。

番号を知らないから自分からかけることもできない。

『今度、デート誘ってもいい？』

その問いかけに彼女は、恋人がいるからと断った。

年上の彼女にとって自分は弟みたいなもの。潤がどんなに藍のことが好きでいても、彼女の方が興味がないのであれば意味がない。

『そっか、じゃあ、フリーになったら電話して』

そう言って、番号とアドレスを渡した。

にこにこ笑っていたが、内心はどうしようもなく落ち込んでいた。
上手くいっていなそうな二人。

それでも彼女はアングとかいう恋人との関係を修復したがっているように見えた。

外から見て潤が彼女のことをどれくらい好きかなんて分からないのと同じように、彼女がどんなに彼のことが好きかなんて分からない。

そしてあの恋人がどんなに彼女が好きかも分からない。

彼女に「止めて」と言われたからと言って、他の男とどこかに行こうとしている彼女に声をかけようとしなかった。

藍のことをそんなに想っていないのか、苛立っているのか、あるいは潤のことを男として認識していないのか。

『高校生にまでヤキモチ焼くのは止めて』

潤は彼女の言葉を思い出して溜息をつく。

「俺を男として見てないのは藍さんの方じゃん」

三角関係になる以前の話だ。

自分が情けない。

潤は深い溜息をついた。

せめて、同じ年なら、変わっていたのだろうか。

※ ※ ※

電話が繋がることはなかった。

もう、何度も彼のところに電話をかけているのに繋がらない。

藍は電話を鏡台の上に置いた。

部屋にあるアンティークの鏡台は母が使っていたものだ。引き出しの中には化粧品の代わりに思い出の品が入っている。

からり、と軽い音を立てて空いた一番上の引き出しには卒業証書が入っている。

自分のものじゃない。

お願いして預からせてもらっている隆明の卒業証書だ。その横に

ある小さなケースの中には、捨てられていたピアスの片側。

事件に巻き込まれたのか、自ら失踪したのかそれさえも分からない彼が残したのはこの二つだけだった。

彼の言葉が信じられなくて未だに忘れずにいる。

それが安吾を傷つけている。

『俺が忘れさせてやる』

そう言われて彼とつきあい始めた。

元々、隆明とつきあっていても一緒にいることが多かった安吾と自分は、長い間つきあってきたのと同じような関係にすぐになれたけれど、安吾は同情心で自分とつきあっていていのではないかという不安感がいつまでも隆明を忘れさせなかった。

自分は安吾の事が好きだけど、彼がそうだとは限らない。嫉妬しているのも藍がどうというよりは「自分の彼女が」という気持ちからだろう。でなければ、あの時、引っ張ってでも止めて欲しかった。好きなんだ、という証拠が見たかった。

（情性でつき合っているんだわ、私たち）

別れるなら、それでもいい。

けどちゃんと話し合ってから決めたかった。隆明のような終わり方にならないためにも。

『今度、デート誘ってもいい？』

本気か、ただのナンパなのか。蒼井はそう言って笑った。

それをにべもなく断ったのは彼が隆明に似ていたからだだろう。

今もまだ、隆明のことを忘れずにいる自分が彼に惹かれないわけがない。あの時頷いていればきっと全員が傷つくことになる。

煮え切らないまま、何も解決しないまま、進んでしまうのがいやだった。

それに、

「……私は、安吾のこと」

呟いた声が妙に冴えていて藍は全身が粟立つのを感じた。

吐き出した息が、暗い闇の中に沈むように、言葉はそれ以上続かなかった。

11話 追憶・まぶたの裏の青い空

「どうして分かったの？」

落ちる雨粒を見ながら少女は首を傾げた。

雨が降るからそろそろ雨宿りをしよう。そう言って彼が喫茶店に入ったのは十分ほど前のこと。まだ青く晴れ渡った空の下でバイクに雨よけのシートをかける彼を、通りすがりの人達は怪訝そうに見やっていた。

天気予報でも今日は晴れ。

誰もこんな大雨になるとは思っていなかった。

「俺には予知能力があるんだよ」

彼はそう言って笑った。

冗談なのか本気なのか分からない表情だが、彼が予知能力があるというのならそうなんだろうと思えるほど彼の勘は鋭かった。

まるで全ての行く末を知っているかのような不思議な瞳をした人、城沢隆明。

彼と親しくなったのは高校に入ってから暫く経つてのことだった。幼なじみだった麻木安吾とは小さい頃は一緒に遊んだ仲だった。それが年を重ねるうちに疎遠になり、高校に入ってクラスメートになっても話すこと何てほとんど無かった。それを変えたのが隆明だった。

安吾とよく一緒にいた隆明は、二人が幼なじみと知って藍にも声をかけるようになった。

彼らは髪を染めたり、ケンカをしたり、バイクを乗り回したりするなど、特にいい噂を聞くようなタイプの生徒ではなかった。それでも顔が良く「ちょっと悪っぽい男の子」に憧れる女生徒たちには割と人気があった。

別にそれに興味の無かった藍は、隆明に声をかけられた時からかわれているだけなのだと思った。

けれど、徐々に徐々に彼のことを知っていくと惹かれていくのが分かった。

昔は安吾とも仲が良かったのもあってか、自然に3人でいる時間が長くなった。

そして藍は彼に恋をした。

『ちょっと走りにいかない?』

休日にそう誘われて藍は二つ返事で承した。

彼のバイクの後ろに乗せられて走る道は、普段とは違った景色だった。

何もかもが新しく輝いて見えた。

藍がどの景色を喜ぶのか、初めから知っていたかのように、彼は色々な風景を見せてくれた。

「雨が止んだら、もう少し先まで走ろう。見せたい場所があるんだ」

雨上がり、彼が彼女を連れて行った場所は、高台にある公園だった。

近くには天文台があり、夜に来た方がずっと綺麗な景色の見えそうな場所。

まだ日の高い昼。公園内にいるのは散策に来た老夫婦くらいで人の気配なんてほとんど無い場所だ。

「神田川さん、こっち」

彼に案内されるまま、彼女はそれに従った。

天文台の方ではなく、公園内で一番高くなっている場所。そこは小さな広場のようになっていて街を一望することが出来た。

「・・・すごい、この街ってこんなに広がったのね」

「うん、だけど見せたいのはそれじゃないよ。ちよつと後ろを向いて」

「え?」

言われるままに彼女は後ろを向いた。

「柵に寄りかかってみて。大丈夫、雨降った後だけど、濡れたりしないから」

傾斜のかかった高台の柵は寄りかかると少しからだが斜めになる。そのまま上を見上げると木や電線に邪魔をされない青空がずっと広がっていく。

まるで、この世界に空しかないような奇妙な感覚。

雨上がりの、まだ雲の残る空なのに、澄み渡って届きそうなほど近い。

怖くもないのに、全身に鳥肌が立った。

「虹が・・・かかってる」

「雨が降った後だからね。ここからの空が一番綺麗に見えるから、神田川さんに見せたかったんだ」

「うん・・・本当に綺麗」

気に入ってくれて良かった、と彼は笑う。

「俺、神田川さんの事、好きだよ」

「え？」

藍は驚いて彼の方を向いた。

同じように柵にもたれかかって空を見上げていた彼は、上を向いたまま少し照れくさそうに続ける。

「初めて見た時、懐かしい気持ちになったんだ。ずっと昔、俺が生まれるよりずっと前から知っているような気がしたんだ」

「・・・」

「ずっと気になってて、話してみて好きになった」

彼の瞳が藍を見る。

藍は赤くなった。

すぐに言葉が出てこない。

「あ・・・わ、私も」

好き。

言葉が出てこない。

その言葉を絡め取るように、隆明の唇が藍の唇に重なった。

突然の事で混乱した。

何が起こったのか分からない。

彼の唇が離れ、吐息を感じたところで、初めてキスをされたことに気が付いた。

顔が熱い。

彼の顔がとても近くにある。さっき重なり合った唇がまだ側にあ
る。不思議な気配をした優しい瞳が彼女の目を真っ直ぐ見つめてい
た。

「もう一度、していい？」

心臓が跳ね上がった。

囁くような声。

ちよっとお調子者で喧嘩っ早い普段の彼とは違う。どこか大人の
気配の混じった低く掠れた声。

それでも怖いと感じなかったのは、声音が優しかったからだ。

うん、と頷くと、一度目より深く重なった。

12話 誰かが呼ぶ名前

誰かが名前を呼んでいる。

それは誰の名前？

俺の名前？

分からない。

いつの記憶？

誰の記憶？

どうして思い出すのだろう。

どうしてこんなにも胸が締め付けられるようなのだろう。

俺は誰？

今、どこにいる？

苦しい。

誰か・・・

誰か、助けて。

「あーおーい君」

呼びかけられて潤ははっと目を開く。

ぐるっと見回した見慣れた天井。

自分の部屋でも、学校でもない。

ここはどこだっただろう。

「ライブ終わったよん、打ち上げやるけどお前どーすんの？」

「・・・たろーちゃん？」

「ん？ 何？ どーしたの、そんなセクシーな声を出して。俺を誘

ってんのかにゃー？」

金髪で妙な仮面をかぶったままの童顔の男が嬉しそうに問う。
すかさず青い髪の方が首根っこを捕まえて睨みをきかせる。

「タロ、楽屋で高校生相手に問題起こすなよな」

「そうよ、どうせならもっと人が沢山いて別のファン層の増えそう
なところでやってよね」

「そう言う問題じゃないだろう」

赤い髪の方が冗談を飛ばし、それに突っ込みを入れたのはライブ
用に変な色に髪を染めた江田だった。

潤は起きあがって息を吐いた。

（そっか・・・クワトロのライブに来てたんだっけ）

亜夜のイトコである江田は南陽の三年生だ。亜夜経由で知り合っ
た先輩は、学校に内緒で「クヴァドラート」というヴィジュアル系
のバンドを組んでいる。

インディーズにしては人気のある方で、メジャーデビューも近い
と噂されている。

そのボーカルである江田を半ば脅すような形で楽屋に出入りする
権利を得た潤は時折こうしてここで休んでいる。

あまり家に帰りたくない事情があった。

それを聞かずに受け入れてくれるクワトロのメンバーはとても心
地良い人達だ。江田以外は本名も素性もよく知らない人達だが、潤
と同じように家庭に居心地の悪さを感じて来た人達なのだと思う。

特に、金髪童顔の男、タロは潤のことを気にかけてくれている。

こうしていつもからかうようにしてくるが暗い気持ちの潤を察し
てわざと明るく振る舞ってくれているのだと知っている。

バンド組んでいる割にもものすごく音痴だが、良い奴だと思う。

潤にカワサキのバイクを譲ってくれたのも彼だ。彼は潤を弟のよ
うに可愛がり、潤もまた彼に懐いていた。

「どうした、顔色が悪いぞ？」

江田は「学校にばらす」と脅して無理矢理ねじ込んだにもかかわ

らず、潤に対して妙に優しい。面倒見が良いとでもいうのだろうか。心配そうに覗き込んだメイクをしたままの顔に潤はへらりと笑う。
「夢見が悪かったただだよ。俺今恋しているからさあー、その人に振られる夢を・・・」

「初耳！ 誰？ 私の知ってる人？」

赤髪の女は面白そうに問う。

「多分知らないだろうな、神田川藍って言うんだ」

「アイ？」

「あらま」

反応したのは江田とタロだ。

「何？ 二人とも知っているの？」

江田は首を振る。

「アイって名前にいい思い出がないだけだ。去年ここに来た女刑事の名前が確か愛だっただろう？」

「そうだった？」

「お前、覚えていたんじゃないのか？」

タロは仮面を付けたまま逆立った髪の毛を直し言う。

「んにゃ？ 俺はその神田川さんっての知ってっばいから」

「え・・・？」

「何かやたらセレブっぽい感じの子だろう？ 二十四、五の」

「え？ まさか知り合い！？」

「一度二度喋ったことある程度だけど・・・。ほら、お前にやったバイク、あれの最初の持ち主の彼女だったんだよ」

一瞬、何を言われたのか分からず、潤は目を見開いた。

言葉が出てきたのは一拍置いてからだった。

「え？」

「城沢隆明っていうちよっとお前に似た感じの奴なんだけど、急にどっか行っちゃってなあー。いなくなる少し前に、このバイク誰かにやってくれ、って置いていったんだよ。あのバイクとことん神田川さんとやらと縁が深いんだな」

違う、と潤は思う。

バイクが潤と藍を繋げている訳じゃない。

そう、バイクが、二人を繋げている訳じゃない。

13話 死が結末なら納得出来ない

何をしても気分は晴れなかった。

幸村との密会も、言い知れぬ罪悪感を残しただけで気晴らしにはならなかった。ただそんなときでも身体は貪欲に快楽を求めている。いつにも増して感じる背徳感が安吾を酷く興奮させた。

疲れ果てた彼女はベッドの上で寝息を立てている。

彼女を起こさないようにシャワーを浴びて、彼は駐車場へと出た。彼のヤマハはいつものように止まっている。エンジンをかけるとそれに被さるように外から別のエンジン音が聞こえた。

他にこの辺りを走っているバイクがあるのだろうか。

ヘルメットをかぶって安吾はDSに跨った。

瞬間、駐車場にバイクが入ってくる。

こんな場所で他の客と鉢合わせするのはあまり気分の良いものではない。安吾は小さく舌打ちをして早くバイクを走らせようとする。しかし、後から入ってきたバイクは彼の邪魔をするように陣取る。いつか見たカワサキのバイク。

(隆明?)

彼は訝りながらバイクの主に声をかける。

隆明ではないかもしれない。

「悪いがバイクを出したいんだ、どいてくれないか」

声をかけると男は退く意思がないと示すようにエンジンを切る。

隆明なのだろうか。

それとも単に面白がって嫌がらせをしている奴だろうか。

安吾は様子を窺った。

「お前さ、彼女は責めるくせに自分はこんな事してんのな」

「・・・!」

「本気で幸せにするつもりがないようなら、早く別れてやんなよ。別れ話すら拒むのはどうかと思うぜ?」

「隆明・・・なのか？」

問いかけて、安吾は口をきゅっと締める。

声が違う。

体格も違う気がする。

だが、バイクも、しゃべり方もそっくりで他人という気がしない。誰だろうか。

どこかで聞いた声だ。

安吾の呟いた声は聞こえていなかったのか、バイクの男は肯定も否定もせずに小馬鹿にしたように笑って見せる。顔はヘルメットで覆われていたが、気配と声音で分かった。

「俺が口出しするようなことでもねーけど、一人で恋愛したいなら、ゲームでもやってろよ。彼女はものじゃないんだからな」

「そんなことは分かっている」

安吾はむっとした。

別に彼女をものだとは思っている訳ではない。周りからそう指摘されてもおかしくないような事をしているが、彼女のことは大切に思っている。

ただ、大切すぎてどうして良いのか判らないだけで。

「進歩ねーのな、お前。意地っ張りで臆病。だから、親友に好きになった女の子奪われるんだよ」

まるで見てきたかのような口調。

知っている人間でなければ言えないような事だ。

「隆明、なのか？」

安吾はもう一度口にした。

今度はエンジンを止め、ヘルメットを外し、はっきりとした口調で。

相手の男はヘルメットを外した。

隆明だった。

七年の歳月を感じさせないあの時のままの姿だった。しかし、それはすぐに錯覚なのだと気付く。髪の色は似ていたし、片耳のピア

スは藍が誕生日に送ったものとそっくりだったが、彼では無かった。顔立ちが違う。

あの日、藍を連れて行った高校生・・・蒼井潤と名乗っただろうか。

隆明ではなかった。

気に入らないものでも見るように安吾は眼を付けた。

「お前か」

「悪かったな、その隆明ってやつじゃなくて」

呑んでかかるような笑い。

年上の人間に対しては随分と生意気だ。

感情を表に出さないように、出来るだけ表情なく睨む。本当はむっとしていたし、動揺もしていた。

彼は隆明ではない。

なのに、どうしてこれほど似ているのだろうか。

「彼女を悲しませたくはないからさ、このことは内緒にしておくけど、早く会ってやんなよ。連絡来てるんだろ？」

「お前には・・・関係の無いことだ」

「無くないさ。だって俺、彼女のこと好きだからさ」

恥ずかしげもなくさらりと言う。

本気か冗談かもつかない軽い口調。だが、その瞳は嘘や冗談で言っているようには見えない。口元こそ緩んではいるものの、その目は鋭い意思を感じさせる。

安吾は目を背けた。

「だったら、勝手にすればいい。藍にもそう伝えろ」

「自分で伝えたら？」

「俺にその資格はない。分かるだろう？」

「分かんないよ」

蒼井はふん、と鼻を鳴らす。

「分かんないけど、許可が出たなら好きにさせてもらおうよ。高校の時みたいに後で後悔したって知らないからな？」

隆明が藍に告白すると決めた時、同じ事を言われた。

彼は、少なくとも隆明と藍と自分の関係を知っている。知っていてわざと煽るような態度をとるのだ。

「お前、隆明とどういう関係があるんだ」

「さあな」

「あいつは今どこにいたんだ？」

睨むと、冷ややかな瞳が戻ってくる。

ぞくつとするほど無感情な瞳だ。

彼はその瞳のままちらりと笑った。

「知らね。死んだんじゃないの？」

ぐん、とエンジンがかかる。

「まて！」

その答えでは納得がいかない。

呼び止めるが、カワサキのバイクは主を乗せて走り始める。

隆明の乗っていたバイク。多少いじられて姿が少し変わっているけれど、あれは確かに隆明が乗っていたカワサキだ。

そのバイクに乗っているのだから、関係がないわけではない。

知らないわけではない。

隆明は今、どこで何をしている？

どうして卒業式にも出ずにいなくなった？

死んだ、なんていう結論じゃ納得できるはずがない。

14話 心配するような事なんてない

「食欲無いね、どうしたの？」

東雲に問われ、藍は顔を上げた。

目の前に出てきた料理もつくばかりでほとんど食べていない。半身の崩された魚のムニエルが皿の上に残っていた。

藍は無理して微笑む。

「何でもないです、ちよつと考え事をしてただけで」

東雲は少し心配そうに首を傾けた。

「心配事？」

「ちよつと陽君、私のいっちゃんを口説かないでくれる？」

丸いテーブルを囲んでいる3人目が抗議するように口を挟む。

3人目は藍の兄、敏重だった。

背が高く体格の良い彼だが、服装は女性的だった。兄妹の顔はよく似ていて綺麗ではあるものの、彼はどう見てもオカマにしか見えない。

事実、彼はそうだった。

父親への反発心がこうなったのか、それともこうだったから父親とソリが合わなかったのかは藍も分からない。ただ、家を出た後の兄は何か吹っ切れたように明るくなった。

元々まとまりのない家族がもっとまとまりが無くなった訳だが、二人のことを考えると兄が家を出たことは良かったことのように思える。

「口説くつもりなんてないんだけどね」

「そうかしら？ 貴方って天然のタラシだもの、いっちゃんには会わせたくなかったわ」

いっちゃん、というのは敏重が昔からよく使う藍の愛称だ。

心配症の兄がそう呼ぶたびに、少しくすぐったい気分になる。敏重が愛称で呼ぶ相手は少なからず興味を持っている証拠だ。無関心

のくせに顔を合わせるといちいち干渉したがる父親とは違って暖かい感じがする。

「デートに過保護な兄を連れてくるようじゃ、脈無しだろう？ シゲが心配するようなことはないって」

「眞由美って呼んでって言っているでしょう？ もう、教師のくせに物覚えが悪いんだから」

頬を膨らませる敏重を見て東雲はくすくすと笑いを漏らした。

別にオカマバーとかで働いている訳ではないのだが、敏重は「藤岡眞由美」というオカマとしての名前で呼ばれたがる。神田川敏重、という角張った名前が嫌だとは話をしていたが、実際そうではなく父親を思い出すから嫌なのだと思う。

東雲に食事に誘われて敏重に連絡を取ったのは、やはり安吾とのがあったからだ。

二人きりで食事をしていてまた勘ぐられるのが嫌だというよりは、蒼井に「恋人がいるから」と断った以上、ここで東雲と二人で食事をすることは失礼だと思ったのだ。

兄を交えての食事であればさすがに何も勘ぐられる要素はない。女装している男と、気の優しいそうな男と、藍の3人では妙な取り合わせに見えるのは否めないが、東雲と二人と言うよりはずっとマシだろうと思う。

まあ、でも、と敏重が頬杖をついて東雲を見る。

「私としては、陽君の方がずっとマシなだけだね」

「マシ？ 誰と比べて？」

東雲の問いに敏重はちらりと藍を見て答える。

「決まっているじゃない。藍の彼氏君よりも、よ」

藍は苦笑いを浮かべる。

敏重が安吾のことを嫌っているのは知っている。大学を卒業して逃げるように家出をした兄だったが、藍とは連絡を取り合っていた。時々食事をすることもあったため、話はしていたし、どうやら藍の知らないところで直接会って話をしたこともあるらしい。

軽々しく「別れろ」とは言わなかったが、二人の関係を好ましく思っていないことは直接言われたから知っている。

東雲はくすくすと笑った。

「随分嫌われているようだね、麻木君は」

「前は少し見込みあるかな、って思ったんだけど、最近はてんでダメ。いっちゃんってばどうしてあんなのとき合っているの？」

「どうしてって・・・好きだから」

疼くように心がざわめいた。

自分の言葉に違和感を覚える。

好きだから？

本当に？

誰かにもう一度問われれば即答出来ないだろう。幸いにもどちらからも問い返されることは無かった。

口を開きかけた敏重の携帯電話がメール着信を告げる素っ頓狂なメロディを奏でたからだ。

「あっ・・・もう、最低！ 仕事だわ」

食事の手を止めて東雲が問う。

「何か事件？」

ん、と彼は曖昧に返事をする。

事件だろう。

刑事課に所属する彼が関わるとすれば事件性のある事だ。食事中でもあるし、関係者以外には話せない立場、一番は藍がいるからだろうが彼はそれ以上事件について口を出さなかった。

そうなると大体どんな事件かが想像つく。

「陽君後のことよろしくね。それとごちそうさま」

「勝手だな」

そう言っているものの東雲に責めた風は見られない。

ふふ、と敏重が笑う。

「女の子に払わせる気なんかないくせに」

「女の子にはね。ま、いいよ、今日は特別」

「ありがとう。それじゃあ、いっちゃん、これに何かされたらすぐに言うのよ」

「これって・・・」

東雲をちらりと見ると彼は肩をすくめて見せた。

敏重の暴言は今に始まったことではないのだ。東雲も同じくらいのことを言っているわけだからどっちもどっちと言うところだろう。足早に店内を後にして、彼がタクシーを拾ったのが窓越しに見えた。

こういう光景は珍しい事じゃない。一時期、警察に関わらなかった時期もあるが、復帰したところを見るとやはり彼は刑事の仕事が向いていたのだろう。

家にいた時よりずっと生き生きしている。

あの家は、兄がいなくなつて余計に息が詰まるようになったが、それでも兄が幸せなら少しは救われる。

好きだから幸せになつて欲しい。

そう願うことは自然な事だ。

「結局、デートになつちゃたね」

東雲は苦笑して言う。

「そう、ですね」

「帰る？」

すぐに答えが出てこなかった。

帰りたくはないけど、このまま東雲と一緒にいるのは良くない気がした。

東雲は見透かしたようにくすりと笑う。

「もし、行きたいところがあるようなら、食事終わったら送るよ？」

15話 身勝手な恋愛

東雲の青みがかったシルバーのセダンが彼が大学時代からの愛車だ。

大学の入学祝いも兼ねて、免許をとったお祝いに父親から送られたものだ、家庭教師をしていた頃に聞いたことがある。十年以上乗り回してこれだけ綺麗な状態なのだから本当に丁寧に乗り続けているのだろう。

元々性格も温厚で注意深く、ものを大切にする彼が事故を起こすわけもなく愛車とともに一点の曇りもない免許はゴールドだった。

藍は乗り心地のいい助手席に乗ってすっかりリラックスしていた。柔らかいクッションは前回乗った時には無かった。藍を再び乗せることを想定して購入したのだろうか。こういうところに東雲の優しさが滲み出ている気がする。

「それで本当は何かあったんだろう？」

「え？」

彼に問いかけられ、藍はぎくりとする。

「さっきはシゲがいたからね。本当は安吾君と何かあった」
断定されて、藍は言葉に詰まる。

返事をしなくてもこれでは肯定しているのと同じだ。

少し迷ったが、誰かに相談したかったのも事実だ。自分でも安吾とのことはどうして良いのか判らなかった。藍は東雲と会っていたことで嫉妬されたということだけは伏せて話をする。

一度話し出すと止まらなかった。

話すつもりも無かった事までつい口走ってしまう。

安吾のこの不安。安吾のこの不満。そして会ったばかりの高校生に惹かれていること。昔の恋人を忘れずにいること。

口にしてみると自分の身勝手さを改めて感じる。

東雲の目には傲慢な女と映るだろう。それでも、言葉は止まなか

った。

涙が出てくる。

こんなところで泣くなんて、卑怯だ。

こんな女、安吾が好きでいてくれる訳がない。

「本当に安吾君が好きなんだね」

「はい・・・でも、私、自信がなくて・・・本当に好きでいるか、彼が自分を好きでいてくれるか」

「その人の為に泣けるってことは、その人が好きだって言う証拠だよ。・・・だけど、君のその涙は自分の為の涙だ」

ちくり、と胸が痛む。

言う通りだった。

弁解することも出来ない。

「身勝手だね、自分でもわかっているんだろう？」

「・・・はい・・・でも」

「でも？ 『でも安吾も同じように身勝手』？ そう言う言い訳なら聞きたくない」

車が止まる。

住宅街の小さな公園。

街頭に照らされて細い道だけが明るく見える。

自動販売機の近くに彼は車を停車させた。

「藍」

呼び捨てにされて、戸惑う。

普段とは様子が違う。

東雲が自分のシートベルトを外した音が車内に響く。

「いつまで子供の恋愛をするつもり？」

彼の手が藍の方に伸びた。

「！」

がくん、とシートが後ろに倒れる。

東雲の身体が彼女の身体の上にのしかかった。

「・・・先せ・・・」

声が途切れた。

手が捕まれる。

恐怖で声が出なかった。

抵抗しようにも強い力で押し付けられた手がピクリとも動かない。東雲はどちらかと言えば細い方だろう。国語科の教師というだけあって、運動よりも勉強が出来た口だ。それなのに手は藍の腕を簡単に掴んでしまうほど大きい。

力も遥かに強かった。

上から注ぐ街頭の光が逆光となって彼の表情は見えない。

怖かった。

彼女の知っている東雲は優しく荒っぽいところなど微塵もない男だった。

ケンカ上等の安吾や隆明でさえ、藍に対しては優しかった。

こんな風に、荒っぽく倒されることなどなかったのだ。

それだけに怖かった。

身体が震える。

東雲がまるで知らない誰かのように酷く怖かった。頭の中がかき混ぜられたように酷く混乱している。

はぁ、と上から溜息が落ちる。

「・・・分かっただろう、男がその気になればいつでもこういう事ができるんだ。自分に好意を持っていれば相手も無防備になる」

強く握られていた手がゆっくりとほどける。

「大切に思えば思うほど、男は女の子以上に臆病になる。探り合うような優しい恋愛をしてくれる。藍のように無防備な子が、今までこういう事がなかったことは、よほど大切に思われているって事だよ」

「・・・」

「安吾君はとても大切に思っている。だけど、素直じゃないのは男としてのプライドが邪魔しているからだ。意固地にさせているのは、藍の昔の恋人への思いだよ。だけど、うまくいかないのはその人の

せいじゃないよ」

「あ・・・」

何度、思っただろうか。

まだ隆明のことが忘れられないから、安吾を傷つけている。隆明のことを忘れられないから安吾とうまくいかない。

自分のせい、そう思いながらも突然消えてしまった隆明を責めていた。

彼が帰ってきてくれれば、せめてもう一度会うことがあれば解決して先にすすめるのに。そう、何度思っただろうか。

そんなの、安吾とつき合う選択をした時点で言い訳にならないと言うのに。

「高校生の子が、好きになったのなら責めないよ。寂しい時に側にいてくれた人が好きになる、それは俺にだってよく分かる。けどね、二人の選択肢を曖昧にしたままは良くないよ」

「でも、連絡が取れなくて・・・」

「また言い訳だ。連絡をくれない彼が悪い？ 家も仕事場も知っているのに、直接会いに行かなかったのはどうして？」

「それは」

怖かったのだ。

終わってしまうのが怖くて、彼の方から連絡が謝罪の電話が来るのを待っていた。そして何より、悲劇のヒロインに浸っていた。

誰かを責めて、悲しんでいる方がずっと楽だったから。

ふわり、と東雲が笑う気配がする。

「分かったなら、お説教はオシマイだ」

すっかり普段の風に戻った彼は藍の方にハンカチを差し出す。

「本当は俺だってそんな説教出来るほどでもないんだけど・・・」

・どうする？ 行きたいところ、あるなら送るけど？」

藍はハンカチを受け取って目元を拭いた。

行きたいところ、思い浮かんだのはあの場所だった。

「・・・・大学に、行ってくれますか？」

16話 彼と彼女と、彼女

うまくいったら電話を鳴らして、そうしたら黙って帰るから、と東雲は言った。

正直、東雲がどうしてそこまで自分を気にかけてくれるのか分からない。親友の妹と言うことはあっても、一步間違えば悪役になりかねないやり方で説教をしてまで自分に優しくしてくれる必要なんてどこにもないのだ。

もしも藍に気があるのなら、ムードで流して押し切ってしまうえば良かったのだ。藍がいくらそう言うことが嫌いだと言ってもあの状況で甘い言葉で慰められたら彼の方に転がっていってしまいうだったのだ。

そうしなかったのは東雲が紳士だったからか、藍がどう転んでも恋愛対象にならない存在だったかのどちらかだ。

彼に強く握られた手の感触を思い出しながら藍は大学の研究棟の方に入った。

安吾は比較的遅い時間に研究室に入る。

今やっている大々的な研究のため、研究スペースが少ないのが一番の要因だ。もう管理人が帰宅した校内へ入るにはIDが必要だ。そうでなければ内側から開けてもらうしかない。

藍は呼び出しのボタンを押す。

ややあって出てきたのは見知った顔の研究生だった。

「安吾？ 多分まだ残っていると思うよ」

彼に中に入れてもらい、彼女は安吾が良く使うと教えてもらった研究室の方へ行く。

この大学には、安吾とは関係なく何度か訪れたことがあったのだ。大学教授を父親に持つと言うことは、必然的に関連も深くなると言うことだ。

研究室の方へ行くと、その手前にある喫煙所に研究者らしい女の

人が見えた。軽く会釈をして彼女の前を通り過ぎ、灯りのついたドアをノックしようと手を伸ばす。

「何かご用？」

女が問いかける。

疲れた様子の彼女は煙草を灰皿に捨てて近付いてくる。

強い香水の匂いが煙草の匂いをかき消した。

年上の気の強そうな女の人。三十代半ばくらいだろうか。独特の艶っぽさをもっている彼女の前では自分が随分と子供っぽいように思えた。大人の魅力とはこういうところを示すのだろう。

「研究生、じゃないわよね、見たことが無いわ」

「麻木安吾さんに用があるんですけど」

「麻木君に？」

彼女の瞳が訝るように少し動いた。

ややあつて赤い唇が笑いの形を作る。

何か挑戦するような、小馬鹿にしたような嫌な笑い方だった。

「彼なら今日はもう帰ったわよ」

「そうなんですか？」

「彼女とデートじゃないかしら、何か伝言があるのなら伝えるけど？」

微笑んだ彼女の瞳は笑っていない。

女の直感だ、と藍は思う。

直感的に分かる。この人は安吾に好意を持っている。そして自分が安吾の恋人であることも気付いているのだ。

その上で牽制と挑発を込めて言っている。

藍は彼女の目を真っ直ぐ見て微笑んだ。

「いえ、また来ますから、大丈夫です」

「そう？」

彼女は勝ち誇ったように首を傾げた。

藍はきゅっと唇を結んだ。

この人は、安吾と関係を持っている。多分、一年くらい前から。

その前から少しずつすれ違っていた二人の関係が、もっとぎくしゃくし始めた頃。それが一年くらい前。安吾がこの研究室に入ってからのことだ。

薄々とだが浮気をしているのではと感づいていた。だが、隆明のこと也有着て追及できなかった。なにより、彼を信じたかったと言うのもあるだろう。

だから何も言い出さなかったし、疑惑だって心の奥にしまって気付かなかったことにしていた。

けれどそれが今確信に変わった。

（浮気相手はこの人）

裏切られた失望感は不思議と無かった。安吾を責める気持ちも無い。彼女に対する憎しみも顕著には表れなかった。

ただ、少し悲しい。

やっぱりそうだったのか、と納得している自分が少し悲しかった。

「あの、やっぱり一言だけ伝言お願いします」

「何？」

「神田川が来た、とだけ伝えて下さい」

女は笑顔だった。

しかしその視線は射抜くように鋭い。

藍は黙ってその視線を受け止めた。跳ね返すように。

「・・・伝えておくわ」

女が一度瞬いてから答えた。

※ ※ ※

かちやり、と音がして幸村が入ってきた。

「神田川さんが来たわよ」

安吾は何も言わず視線だけを上げた。

彼女は肩をすくめる。

「大丈夫、帰ってもらったわ」

「そうですか、ありがとうございます」

淡々と答え、安吾は作業に戻る。

くすりと笑って幸村が近付いてきた。

「今は二人きりよ」

「だけど、研究室だ」

普段この研究室に出入りする人間は今出払っている。滅多なことがない限り誰も来る心配など無いのだが、公私混同は良いことではない。

安吾は肌の触れる位置に立った幸村から少し距離を置く。

数値の入力の為にキーボードを叩いていた手を、幸村が掴む。

「イライラしているわ」

「そんなことない」

「そう？　最近ずっと苛立っている。いいのよ、私にぶつけても。

全て受け止めるから」

彼女の言葉は淫靡な響きを持つ。

大切な物を扱うように安吾の手を自分の頬に触れさせ、親指を舐める。女の柔らかな唇が自分の中の欲望を呼び覚ます。

ぞっとした。

男の中に巣くう魔物はこんな時でも女という悪魔を求める。満たされない心の分、その感情はくらくら燃える灼熱のマグマのようになりかけさえあればすぐにでも吹き出しそうになっている。

お互いの肉体を知っているから、お互いに扇情的な言葉を知っているから、目を見るだけで、触れるだけで何を求めているのか分かってしまう。

傷をなめ合った男女だけの密計。

密かな駆け引き。

彼女は安吾の手を掴んだまま徐々に下へと這わせていった。

唇から顎へ、首筋へ、胸へ、腹部……そして、

「止めてくれ！」

安吾は彼女の肩を掴んで自分から引きはがした。

彼女が驚いたように目を見開いた。

苛立つ。

これが本当の自分だ。

汚く、荒っぽい、野獣のような男。

藍を裏切り、幸村という快楽に溺れ、隆明に全てを転嫁して責める。

分かっていたはずだ。

隆明が何をしようとしたのか。

認められず自分の都合の良い解釈しかしなかった。

だから代わりになろうとしたのだ。藍が好きになった「優しい隆明」の身代わりになろうとした。そうすれば彼女は消して自分から離れないと思っていたのだ。

嘘を塗り重ねた感情など、すぐに剥がれ落ちてしまおうと言うのに。

隆明のようにはなれるはずもないのに。

17話 彼の覚えている彼の記憶

「何？ 遊んでくれんの？」

隆明は顔全体を緩ませて笑った。

外見のせいかな、知れた名前のせいかな、街を歩くと声をかけてくる人間が多い。女は逆ナンが目的で、男はケンカが目的だ。

どちらであっても、彼はいつも嬉しそうに笑う。

だがその微笑みに彼の何も込められてはなかった。誰に対しても。

初めて彼を見た時思い出したのは日蝕だった。明るいはずの太陽が侵されて黒い塊となり、周りだけが輝いて見える。そんな日蝕の太陽を思い出したのだ。

安吾が彼を初めて見た日は中学生の時だったと思う。

他校の生徒がケンカをしているのを見て血が沸き立つのを感じると同時に、中心にいる彼の冷淡な笑みに畏怖にも似た感情を覚えた。それを恐怖と錯覚した安吾は中学時代、彼を避けてきた。

安吾の所属していたグループと彼が関わることがあれば、あるいは出会いはもう少し早かったのかも知れない。だが、それもあることはなく安吾は南陽高校へ進学する。

そして彼と同じクラスになったことに驚いた。

始め、隆明は安吾を意識していなかった。安吾もまた彼に声をかけようとしなかった。

入学して半月ほど経った時、ヤクザ絡みの暴走族の連中に彼が絡まれていたところを見るまでは・・・多分それがなければ卒業まで・・・会話を交わすことも無かった。

錆び付いた匂いと排気の匂いが混じり合う高架橋の下、十数人の男たちを相手に笑った隆明。自身も殴られ、あざを作りながらも大したダメージを喰らっているように見えない。向かってくる男たちを次々と倒していった。

(・・・強い)

安吾自身、色んな人間とケンカをして来たから分かる。

隆明の強さは尋常ではなかった。

まるで相手がどう攻撃してくるかが初めから分かっているように避け、そして攻撃をする。だから、大人数を相手にしているのにも関わらず彼自身はそれほど大怪我を負っていないのだと分かった。衝動的に加勢に入ったのは人を殴っている彼の姿が楽しそうだったからだろう。

会話を交わすことなく乱入した彼を空虚な瞳で見て彼は笑った。

それが安吾を酷く興奮させた。

安吾の乱入で勢いを増した彼の行動は止まらなかった。

殴り倒して次々と足下に累々と人の山を作っていく。戦意すら残っていない連中を無理矢理立ち上げらせ、殴り飛ばす。軽く飛ばされる連中に、まるでオモチャで遊ぶ子供のように楽しそうに笑った。

「おい、それ以上やると死ぬぞ」

さすがにマズイと思った安吾が止めても彼は止まらなかった。

刃物で切られたのか腕から血が流れている。それを気にも留めず彼は男たちを殴り続けていた。

「おい、城沢！」

声は届いていない。

安吾は彼の肩をぐいっと捕まえた。

「止めろ、城沢隆明！ 殺す気か！？」

ピタリ、と彼の拳が止まった。

その目が、初めて安吾を見たかのように見開かれる。

一拍置いて、バカにしたように、その口元が歪んだ。

「何だよ、お前ボロボロじゃねーか。遊んで欲しいならもっとマシな格好でくるんだな」

「言いたいことはそれだけかよ。お前、人を殺すところだったんだぜ？」

「関係ないね」

彼が襟首を掴んで無理矢理立たせていた男の身体が、どさりと音を立てて地面に落ちる。

「どうせ人なんていつか死ぬんだぜ？　生きていたってろくな事しないこいつらの一人二人殺したって問題ねーだろ？」

「お前」

襟首を掴んで安吾は狼狽した。

彼の瞳はけして冷酷なものではなかったからだ。

何故なのかは分からない。その時安吾には、彼の瞳は人を殺して喜ぶような人間の眼には見えなかったのだ。

安吾は彼を殴ることも出来ずに襟を離した。

「何？　何もしねーの？　一発だったら殴られてやってもいいぜ？　十倍にして返すけどな」

「殴ったって反省しないなら、意味ないだろ？」

「ふうん？　じゃあ止めないなら止めたって意味ないじゃないか」
そう言って、彼は足下の男を蹴った。

うっ、と低いうめき声上がる。

「俺最初からこいつら殺すつもりだったからな。意味ないから止めるなよ」

「それとこれとは別だ」

安吾は隆明を押しやって転がっている男たちから引き離す。

「お前がここで人を殺したら、俺まで巻き込まれるだろ！　やるなら他の場所でやれよ！」

隆明がきょとんとした顔で見返してくる。

本当はそんなことを言いたかったのではない。

ただ、ちやうど良い言葉が浮かんでこなかっただけだ。

ここに転がっている連中は彼の言うようにろくな事をしないだろう。だが、こんな奴らにも悲しんで泣く家族だっている。これから先、誰かの役に立つのかも知れないのだ。

だが、そう言ったところで偽善にしか聞こえない。

安吾は視線をそらせた。

ふん、と彼は笑う。

「何だ、結局自分のことじゃねーか」

「そうだよ、悪いかよ」

「悪かねーよ」

「じゃあそんな因縁付けるような言い方すんなよ。人間なんてみんなそんなもんじゃねーか。俺はお前と心中するような度胸なんかねーんだよ」

格好付けているのかそうでないのか良く分からないセリフだ。

安吾は舌打ちをする。

どうして彼の前では上手く言葉が出ないのだろう。そんな安吾の感情とは正反対に彼はけらけらと笑い出した。

「あはは、変な奴だなあ。お前、誰？ 何て名前？」

「クラスメートすら覚えてねーのかよ」

認識していないのは知っていた。

会話もしていないのであれば名前も覚えていないのは無理もないだろう。

それでも少しだけショックだった。

「クラスメート？ へえー、お前みたいなのがいるんだったらもつとまともに学校いくんだったな」

そう言って彼はにこにここと笑う。

先刻見せていたような残忍なものでも表面的な笑みでも無かった。初めて安吾を認識し、興味を持ったような笑い方。どこか人懐っこい犬を思い出す明るい顔。

「名前、何てーの？」

「麻木安吾」

「あんこ？」

「あ・ん・ご、だ！」

「ああ、坂口安吾のアンゴ？」

「・・・お前、学校ろくに行ってなさそうなのに、よく知っているな」

「俺天才だからな」

「頭の悪そうな天才だな」

あはは、と彼は明るい笑いを浮かべる。

人を殺しそうなほど危なっかしい人間とはまるで別人のようだった。

この笑いが造り物のようには見えない。

どっちが本当の彼なのだろう。

どちらにしても厄介な人間と関わったのだと安吾は悟った。

それが、二人の最初だった。

18話 彼の瞳は空を映す鏡のようだった

城沢隆明は、安吾と会った次の日から以前より「まとも」に学校に来るようになった。

それ以前は授業に遅刻するのがほとんどで、たまにまともに来たとしても最初から最後まで寝たままと言うのが普通だった。もっとも、そんな生活態度は安吾と大して変わらない。二人とも授業に出るだけマシな方だったのだ。

「……それが何でお前と一緒に勉強してるんだよ」

昼食の時間、「一緒にお弁当を食べよう」と女子のように誘った隆明はやけに可愛らしいお弁当を食べながら安吾に参考書を投げた。
きた。

遠くで中の良さそうな男女のグループがバレーボールをしているのが見える。隆明は端を口にくわえたまま頭をたいた。

時間を無駄にせず勉強しろ、と言っているわけだ。

「いくら頭良くても勉強しないでついていけるほど南陽はバカ高じゃないぜ？　つーか、ここの偏差値高いだろ、何で安吾はここ来たんだ？」

「それは……」

幼なじみの藍が行くと言っていたから。

だから中三になってからはまともに勉強してギリギリねじ込んだ。
……なんてこと、口が裂けても言えるわけがない。

安吾はそっぽを向く。

「か、関係ないだろ。それよりお前はどうかんだよ」

「俺？　俺はー、あんまり頭が良すぎたから学校のレベルを上げるために欲しいってお金積まれたんだよ。本当は早く独立して金稼いだかったんだけど、タダで高校行ける、生活費もすこーし支給されるってんじゃ行くしかないじゃん？」

「何だそれは」

「ホントの話。俺さ、親に捨てられてさー、孤児院で育ったんだよな。取り敢えず成績優秀ってところだけ残せば孤児院に寄付くれるっていうからさ、ここに入学したってわけ」

彼は空を見つめる。

澄んだ瞳が空の青を映し込んで優しそうに輝いていた。

「だから俺は全国模試とか積極的に受けて、優秀な成績でいる必要があるってわけ」

「お前・・・」

隆明はへらりと笑う。

「なーんて風に言ったら健気な美少年に見えね？」

一瞬、何の事か分からなかった。

しかし、徐々に理解すると、彼はかっと頭に血が上ったのが分かった。

「こんの！」

少し同情しかけたのに言葉が嘘だったのだ。

参考書を投げつける。

隆明は笑いながらそれを受け止めた。

「あはは、だけどさ、この学校結構自由だろ？ 成績さえ良ければ多少ハメ外しても良いって訳だ。さすがに警察沙汰になるのは避けたいらしくて説教はしてくるけど、授業邪魔するくらいなら寝るか出ないかどちらかにしろって言われたぜ」

つまりー、と間延びした言い方をしながら彼は立ち上がってフェンスに寄りかかった。

「安吾クンの成績が上がれば、俺らが何してもあんま文句は言われないわけだ。俺、そのためだったらケンカだって自粛する。だからお前は頑張って成績上げろ。俺が教えてやるからさ」

「くそ、結局自分のことじゃねーか」

「人間結局そんなもんなんだろ？」

揶揄するように笑う。

それは仮にも安吾自身の言った言葉だ。成績を上げる行為は悪い

ことではない。実際成績があまりにも下がれば一年の終わりあたりに進級できないと言う話になってしまいかもしれない。そうなる可能性がある以上、これは安吾の為でもあるのだ。

彼はしぶしぶというふうに隆明の手にある参考書を奪った。

「……どっからやればいいんだ！」

怒ったような口調になってしまったが、彼は全く気にしない様子で彼の横に座り込んだ。

刹那、彼の頭上をバレーボールが通過し、フェンスに当たって跳ね返った。

がしゃんという音と共に、屋上が静まりかえる。

幸い、隆明にも、安吾にも、弁当にもボールは当たらなかった。しかし、バレーボールをしていたメンバーは誰一人としてこちらに近付いて来ようとはしなかった。むしろ後退っているように見えた。

彼らが誰であるのか、分かっているからだ。

入学してまだ一月弱のものだったが、彼らの悪名は知られている。そうでなくても髪を染めて制服を着崩していかにも不良な隆明と、外見から威圧感の滲み出る安吾の二人組だ。真面目に生活してきた連中が恐れないわけがない。

隆明の凶器のような瞳がボールに注がれ、それが彼らに向けられる。

先刻まで自分に向けられていたものとは正反対の、冷たく凍えるような瞳。それはケンカをしている時の彼と同じ目だった。

「……自粛するんだろ？」

小声で注意すると、彼はボールを拾い上げて乾いた笑いを浮かべる。

「だけどな、この場合……」

「ごめんなさい、怪我は無かった？」

隆明の声に被さるように一人の女子がかけてくる。

藍だった。

バレーボールをしていたメンバーの中には彼女はいなかったはずだ。彼らの異様な空気を察したのだろう。

相手の一人が安吾だと知って仲裁に入ってきたのだと思ったのだが、そうではないようだった。彼女は安吾を見て少し驚いたようにした。

「大丈夫、城沢君も麻木君も」

安吾君、と昔のように呼ばなかったのは隆明を気にしたからだろう。

彼女は少し心配そうに見た。

「大丈夫だ、当たってなかったから」

安吾が答えると彼女はほっとしたように微笑む。

「良かった。……城沢君？　どうしたの？　やっぱり当たっていたの？」

ボールを抱えたままぼんやりとしている。ぼんやりと、藍の顔を見つめていた。

冷えていた瞳が、藍を映し込んで何かを見つけたように少し光を帯びた。

彼は彼女に呼びかけられ、ようやくはっとしたように表情を動かした。その瞳が感涙したように少し揺れている。

「いいや、大丈夫だよ。だけどさ、あんた自分悪役にすることないだろう？」

「なんのこと？」

そう言って笑った彼女の手が強く握られているのを安吾は見逃さなかった。

彼女だって怖かったのだ。

隆明の良くない噂を知っているから、怖くて仕方なかったのだ。それなのに、彼女は彼の前で笑っている。

今だって心臓が張り裂けそうになっているだろう。

それなのに、綺麗に微笑んでいた。

まるで、普通のクラスメートと接するのと同じように。

安吾はちらりと隆明の様子を窺った。

人が・・・・・・恋に落ちた瞬間だった。

人生でそんな瞬間を見られることは滅多にないだろう。それまで彼は一度もそんな光景に出会わなかった。だから見間違いかも知れないとも思った。

でも、確信する。

冷たい氷のような白が、染め上げられた美しい藍色に恋をしたのだ。

安吾は口を開けなかった。

おそらく今まで彼は彼女を見たことが無かっただろう。たとえ見ていたとしても視界に入っていなかったはずだ。

それがたった今認識して、彼女の言葉に落ちてしまったのだ。

（くそったれっ）

安吾は心のなかで毒づいた。

彼女は可愛い上に優しいから周りにもてる。そんな簡単な好意だけで彼女の周りをうろつくのなら、それなりに牽制できただろう。

（・・・・出来るわけが、ないだろう）

自分と同じように本気の気配を漂わせた目を見て、彼女に近付くなどと言える自信なんかどこにもなかった。

19話 二人とも好きだった、幸せになって欲しかった

隆明と安吾が一緒にいる姿は周囲に奇異と映っただろう。

多少真面目になったとはいえ、ケンカもすれば煙草も吸う。同じようなタイプの二人が親しげに話をしている姿は、まるで奸計を巡らせているようみえただろう。その二人の間に時折、優等生の藍の姿が見えるようになると思います奇妙に見えた。

隆明は屋上で的一件以来、藍に声をかけるようになった。初めは理由が分からず警戒している様子の彼女だったが、彼に悪意がないことを悟ると次第に自分から近付いてくるようになった。

教師達は重大そうに騒ぎ、藍に対して注意を促す光景を良く目にしたが彼女は全く気にしている様子を見せなかった。

「安吾ってさ、理解力はあるよな」

英文の翻訳をしている時にふと、彼はそう言った。

屋上を陣取って勉強会をするのはもう日課になっている。そのせいか、屋上でバレーをして遊ぶ連中は減った。のんびりと読書を目的とするような連中が格段に増えている。

奇異の二人組を気にしない連中が屋上を占めているのだ。

隆明は安吾に勉強を教えると言い切っただけあって教え方は上手い。彼にバカにされないためにと、多少真面目に授業を受けるようになってから、教師より上手いのではないかと思うようになっていた。

天才だから頼まれて入学したのはあながち間違いではないように思える。

「何だよ、急に褒めたりして」

「いやさ正直ここまで短期でこんなに成績上がるとか思って無くてなあー、言っておくけどお前、今学力トップクラスだぜ？ 案外とバカじゃなかったんだな」

「褒めるか貶すかどっちかにしろよ」

ふてくされたように視線を逸らすが、実際嬉しかった。自分の学力が多少は上がったとい認識もあった。

ただ、学力がトップクラスなんていまいち信じられない。

その言葉が真実であると彼は次のテストの時に知ることになるが、その時の彼はまだ知らなかったし、実感もなかった。

「俺は、お前の事、結構好きなんだ」

「……ん？」

「お前さ、不器用で、口べたで、要領悪いけど、お人好しのくせに意地っ張りで面白い」

安吾はむつとりとする。

好きだ、と突然告白したくせに酷い言いようだ。

「ボロクソ言うなよ」

「褒めているんだよ。お前は俺の名前を呼んだんだ」

「は？ どういう事だよ？ 名前くらい誰だって呼ぶだろう？」

「俺の名前じゃなくて、城沢隆明の名前を呼ぶ連中は沢山いるけどな」

彼の言っていることは良く分からなかった。

ただ、その声音から、酷く孤独な匂いが漂っていた。

「お前は俺を呼んだんだよ。初対面のくせに」

奇妙な気分だった。

普段の調子なら「気持ち悪いな」とでも言っていた所だが、何となく茶化して言いという感じではないと感じ取っていた。

安吾は参考書を置いて彼を見る。

「神田川さんも、俺を呼んだんだ。お前も、彼女もちゃんと俺を見ている。だから好きだ」

言い切って彼は安吾の目を見た。

真っ直ぐ見つめてくる視線は強い。

「俺、彼女に告白しようと思う」

「え？」

安吾は狼狽した。

突然だったこともそうだが、彼がそう言うことを考えていたことにも驚いたのだ。

彼は視線を逸らさずに続ける。真摯な目だ。

「俺はお前も好きだ。だから、告白するの、一週間後にする。・・・この意味分かるよな？」

分かる。

だが、気恥ずかしさと、プライドが邪魔して頷く事ができなかった。

「俺は藍のこと、妹くらいにしか思っていないよ」

そして藍は自分のことを手間のかかる弟としてしか思っていない。幼なじみなんてそんなものだ。

そう自分自身に言い聞かせて。

「安吾」

隆明は真剣な表情のまま続ける。

「後悔するなよ」

一週間というのは長いようで短い猶予だった。

彼の言いたいことはもちろん分かっている。告白するならば今のうちにしろとも言いいたいのだ。藍が誰のことを好きなのか分からないけれど、安吾と隆明、同じくらいに思っているのなら、先に告白した方の勝ちだ。

藍のことだから、例え隆明のことが好きでも安吾に告白され、それを断った直後につきあい始めるなんて事はない。逆もまた同じだ。彼女に告白すべきかは、正直迷った。

結局しなかったのは、玉碎するのが怖かったのと安吾も安吾で隆明のことが気に入っていたからだ。

二人とも好きだから幸せになって欲しいと思っていた。

隆明はもちろん、彼女に告白した。

そして、彼らはつきあい始めた。

つきあい始めても3人の関係はあまり変わらなかった。少し藍が一緒にいる時間が長くなっただけで、今までとあまり変わらない。

べたべたすることも無かったし、変に気をつけている様子もない。

だから少し嬉しかった。

例え誰かの恋人でも、藍と一緒にいる時間が増えただけで嬉しかったのだ。

20話 蝕み続けているのは孤独の記憶

警察から電話がかかってきた時、陽一郎はちょうど家に向かって
いるところだった。

結局恋人との話し合いが出来なかった藍を家まで送り届け、自分
の家に帰ろうとしたところで敏重から電話がかかった。

彼はいつもの様子ではなく、少し強ばったような男の口調で「蒼
井潤を知っているか」と問いかけた。それは仕事上の彼の声だった。
「知っているけど、どうかした？」

相手が警官としてかけたと言わなかったために、彼はあえてラフ
に答える。

少しの沈黙があり、敏重は重そうに答えた。

『事件の第一発見者になったんだよ』

「え？」

食事の途中で彼が呼び出されたのはその事件に関連してのことだ
った。死体を発見したと通報があり警官が駆けつけると真っ青な顔
をした蒼井潤がいたのだという。その死体は既に白骨化しており、
事件から随分と経過していることが分かった。

少年が白骨死体に関わりを持っているとは思えなかったが、彼の
言動があまりにも奇妙なものであったために非番であるはずの敏重
まで呼び出されたのだ。

発見現場はもう何年も人の入った気配のない山林の中だった。薄
暗い状況で人が好んではいるように思えないが、少年は何故かその
中に入って発見している。そこまで迷った形跡もない。どう考えて
も彼が初めから場所を知っていたようにしか思えないのだ。

それなのに、彼は何を問いかけても「分からない」と答えるのだ。
山林に入った理由も、発見した経緯も、彼がどうやってその場所
まできたのかでさえ分からないと繰り返す。

未成年である彼を拘束し続けることが出来ない警察は一旦彼を家

に戻すため両親の元へ連絡する。

『帰ってきたいのなら、帰ってこいと伝えて下さい』

蒼井の父親は警察にそう告げたという。

一悶着あり、結局担任である陽一郎が身元引受人として呼ばれた。彼の家庭環境が良くないと言うのは知っていたが、引き取りを拒否する程とは思ってもいなかった。蒼井の行動は可愛い反発なのだとばかり思っていたが思っていたよりも深刻な問題がありそうだと。

「彼が事件に関わっていると思う？」

蒼井が待っている場所まで行く途中、敏重は陽一郎に問いかけた。さすがに署内では男の格好をしているらしい。

「彼は何て？」

「知らないって」

「じゃあ俺は関わっていないと思う」

「あっさり信じるな？」

陽一郎は笑う。

「人を信じられずに失うのはもう嫌なんだよ」

「ああ・・・そうだったな」

敏重は頷いた。

こうして男言葉の彼と話をしていると大学時代に戻ったかのようだ。あの頃から少し敏重は変だったが、さすがに女装して出歩いたりとかはしていなかった。

蒼井の事を考えるとこの状況を楽しんでもいられなかった。

彼の待っていた部屋は一課ではなく生活安全課にある小さい待合スペースだった。担当の女刑事に挨拶し、身分証明などの必要最低限の手続きを済ます。

女刑事と交わされる事務的な会話の内容は聞こえているはずだが、その間、蒼井はちらりとも向こうとはしなかった。陽一郎も彼には声をかけず手続きを済ませた。

「大丈夫？」

手続きを終えて声をかけると、初めて蒼井が顔を上げた。

泣きそうな顔を想像していた陽一郎は、彼の表情の希薄さに逆に驚いた。普段は心臓に毛が生えているかと思うほど飄々とした態度を取っているだけに、彼の無表情は危ういものに感じられた。

まだ戸惑っていることを隠すために「俺第一発見者だぜ、凄いだろう?」と笑っていた方がよほど彼らしかった。

「蒼井・・・」

「・・・」

無表情で見上げる彼の頬を軽く撫で、微笑んだ。

「泣いたっていいんだよ」

「・・・」

「大人をもう少し頼ってもいい」

「・・・」

「ご両親には許可をとったからね。泊まっていくといい。・・・家に帰ろう」

蒼井は、表情を作れないまま頷く。

立ち上がった瞬間、彼の口からひゅうと息を強く飲み込んだ音がした。

彼は苦しそうにうずくまった。息が出来ないと訴えるように喉元をかきむしるような素振りをする。

呼吸が荒い。

今にも倒れそうなほど苦しそうだった。

陽一郎は咄嗟にハンカチを彼の口元にあてがった。彼の肩に手を置き、耳元でゆっくりと囁く。

「大丈夫、ゆっくり、息を吐くんだ。ゆっくり」

彼は酷く混乱しているようだったが、やがて言われたようにゆっくりと息を吐く。

「うん、大丈夫、深呼吸をするようにね、落ち着いて」

初めは荒かった呼吸も、次第に整ってくる。

一度二度繰り返すと、彼の息は元のように正常に戻っていた。

蒼井は不思議そうに陽一郎の顔を見た。

「……色々あったせいで、呼吸の仕方を忘れただけだよ。良くあることだ、心配することもない」

「……っ！」

今度はボロボロと涙をこぼし始めた。

怖かったと言うよりは不安だったのだろう。

普段飄々とした態度で振る舞うわけは単純な理由だ。

甘える方法を知らないのだ。

彼の家は特別裕福な訳でも貧乏な訳でもない。普通より少し上くらしいの家。そこに生まれたのは身体の弱い彼だった。今は良くなっているものの、幼い頃には入退院を繰り返していたのだと聞く。

本来ならば守られるべき彼が、こんな風になってしまった事情を想像するのはそんなに難しい事ではなかった。

東雲の親類関係はそう言う人種の集まりだ。

いらないのだ。

一族の恥になる人間など、存在している価値などない。東雲はその一族から離れるのを恐れ、大切な存在を失い、最後には自分から一族から離れた。

彼は蒼井を抱きしめた。

本当に抱きしめたかったのは、逃れることも、戦い続けることも出来なかった過去の自分だったのかも知れない。

21話 父親と母親の思い出

子供の頃、家は何処かいつも狂気に満ちていた。

その原因は何か、幼い隆明が分かるわけもなかった。

ただ、好き勝手やって暴れている父親と、その言いなりになるしかない母親という「不幸な境遇」の代名詞のような家の中で育っていた。

酒にギャンブルに溺れ、母親に暴力を振るい、それでも飽きたらず押入の中に隠れていた隆明を引きずり出しては激しく折檻した父親。母親はいつも泣いていて、傷だらけだった。

抵抗するだけの力もない幼い隆明は、泣きも喚きもせず堪えていた。

父親のいない時間にうつすらと赤く染まった空を見ていた。

あの頃の隆明は他の子供より少し発育が遅かった。その上、感情が希薄で周囲には可哀想だけど不気味な子供として映っただろう。

誰かがあの化け物のような父親から、母と自分を救ってくれないか、絵本に出てくる正義の味方が助けに来てくれないか。いつもそればかりを考えていた。

けれど、飛んでくるのは父親の暴力ばかりで救いの手が伸ばされることはなかった。

ただ一度だけ、何かの気まぐれで父親がチョコレートを持ってきた事があった。

貪り食べる自分を見て、悪魔のようだった父親が初めて父親らしい笑顔を見せたのだ。

何かが変わったのだ、と幼い彼は思ったけれど、次の日の父親は元通りの悪魔だった。何も変わってはいなかった。

あれはきつと夢だったのだ、と隆明は思った。

こっちが本当。

だから何も変わっていないからおかしくないのだ。

そう思った。

そんな隆明を母親が不気味な薄笑いを浮かべて見ている。いつのことだったか実は良く覚えていない。

父親が優しくかったという夢を見た次の日なのか、それとももつとずつと後の日なのか、隆明は良く覚えていない。

目を開くと、母親しかいなかった。

「・・・さん？」

声をかけると母親が顔を向けた。

「隆明、起きたの」

「おと、さんは？」

尋ねると彼女は笑った。

笑っているのにまるで笑っていないかのような奇妙な笑い方だった。

「ねえ、隆明、お母さんもう疲れちゃったの」

口癖のように何度も聞かされた言葉。

隆明はじっと母親の顔を見た。

青白い顔をした母親は笑っている。

けれどちつとも嬉しそうではなかった。

いつもとどこか違う。

何か、隠しているような顔。

「・・・一緒に天国にいつてくれない？」

てんごく、その言葉を小さい隆明は理解が出来なかった。

どこなのか分からないけれど、どこか遠くに行こうと言っているのが分かっただけで。

「おと、さん、は？」

それは単純に疑問に思っただけの言葉だった。

一緒に行くのか、それとも二人だけで行くのか。

聞かなければ分からなかったから聞いただけだった。

しかし、母親の顔色はそこで一変する。

ぱちん、と頬がなった。

痛い。

首に何か細いものが巻き付いた。

「貴方は、私よりもお父さんの方が大事なのね」
憎しみに満ちた母親の声。

「私より、あんな事をする父親の方が」

ぼろぼろと、母親が泣きはじめる。

苦しかった。

息が出来なくて、死んでしまいそうだった。

それでも隆明は母親の涙のほうが気になっていた。
いつも泣いている。

それなのに、自分はすることも出来ない。

子供だから、力がないから、父親にはかなわないから。もっと大きく
なって父親からかばえるだけの力があればいいのに。

そうすれば、こうして母親も泣くことがないのに。

（お母さん、泣かないで）

隆明の小さな手が母親の顔に伸びる。

伸びた手が、痛々しく腫れ上がった頬に触れる。

とたん、母親の表情がまた変わった。

「あ・・・あ・・・隆明っ！」

母親の手が緩み、今まで首に絡みついていた手は隆明の身体を包み込む温かい手になった。痛いほど抱きしめられ、ごめんなさい、ごめんなさい、と何度も呟かれた。

自分のせいで母親が泣いている。

辛くてたまらなかった。

それでも隆明は泣くことが出来なかった。

泣くというのは赤ん坊の頃に忘れてしまっただけ泣くことが出来なかったのだ。

彼女は、隆明の身体を離すと、目の涙を拭った。

「・・・ジュースを買ってくるわ、ここで待っているのよ、隆明」
「・・・」

隆明は頷いた。

これ以上、母親の望まない行動をして悲しませたくないのだ。母親が引きずるように外の方に向かっていくのを隆明はぼんやりと眺めていた。

それから長い時間を待った。

部屋のドアを最初に開けたのは「お母さんの友達」という見知らぬ男女だった。

捨てられたのだと、隆明はすぐに理解した。

その時はまだ児童福祉施設という存在を知らなかったけれど、彼らは捨てられた子供を保護する人達で、父親も母親ももう迎えにこないのだと、隆明は本能で悟った。

その日が、彼が母親を見た最後の日だった。

22話 リハビリのような生活

目を開いた。

見知らぬ天井がそこにある。

柔らかいベッドの上だった。

ここはどこなのだろう、と寝ぼけたままで視線を巡らせるとサイドテーブルの上に時計が見えた。一時を過ぎたところだった。これだけ暗いのだからまだ真夜中なのだろう。

潤はベッドから起きあがった。

ぞくり、とした。

思い出す。発見した白骨死体。親が保護を拒否したために仕方なく担任教師である東雲が呼ばれたのだ。そして潤は東雲のセダンに乗せられて東雲のマンションに向かったのだ。

車内で眠ってしまったのだろう。

東雲が自分を運んでベッドに寝かせたのだ。

（じゃあ、東雲は？）

部屋からリビングに続くドアは開け放たれている。そこから顔を覗かせるとソファに頭をかけて眠りこけている東雲の姿が見えた。普段見たことのない黒いTシャツ姿。お腹の辺りにタオルケットをかけて目を閉じている。ソファが狭いために上では眠れなかったのだろう。上半身だけを投げ出すような格好で彼は眠っていた。

「……ん……」

気配を感じたのか東雲が身動きをする。

潤は少し慌てた。

「……何だ、起きたのか？」

寝起きのせいか少し掠れたような声だった。

「ご、ごめん、起こした。ベッドも占領してたし」

「いや、どっちにしても仕事が残っていたから、ここで仮眠を取るつもりしかなかったんだよ。気にすることもない」

東雲の言葉を証明するように、テーブルの上には何か書類のようなものが散乱していた。軽くそれを端に片づけて彼は大きく伸びをした。

「俺のせい？」

「ん？」

尋ねると東雲は怪訝そうな顔を向けた。

「俺が、あんな問題起こすから、仕事出来なかったんだろ？」

本当ならもう仕事が終わっていた時間だろう。東雲のような真面目な人間が徹夜しなければいけないほどの仕事を残すようには思えなかった。

東雲は口をへの字に曲げる。

「あんな問題って蒼井は別に悪いことしていないだろう？」

「だけど・・・」

「第一発見者なんて被害者みたいなもんだ。蒼井が事件に関わったとかじゃなければ堂々としていればいい。それに仕事が遅れたのはデートしていたせいだよ」

「じゃあ」

東雲は片手を上げて言葉を制した。

「妹みたいなものだ。恋人とのことで悩んでいたから少し相談にのってただけで、そういう関係じゃないから蒼井がそんな顔する必要ない」

言われて潤は自分が表情を曇らせていたことに気付く。

迷惑をかけてばかりだ。

そんな思いが表情に出ていたのだろう。

東雲は少し笑って立ち上がる。

「甘いモノ大丈夫？」

「ああ・・・うん」

「アレルギーは？」

「ない」

「うん、じゃあ暖かいカフェオレでも淹れるよ。飲むだろう？」

彼はキッチンスペースに入りエスプレッソマシンをセットする。その行動があまりにもイメージ通りだったので潤は小さく笑った。一人暮らしにしては大きな部屋だったが東雲の他に人のいる気配もない。食器や家具がまるで二人暮らしを想定したように並べられているが使われている様子のあるのは全て片方ずつだった。

誰か一緒に暮らすはずだった人でもいるのだろうか。

不意に、サイドボードの上の写真立てが目に入った。

潤は手に取ってみる。

女の人と東雲が映っている写真だった。

写真の中の二人はいかにも恋人同士という風に映っている。

「・・・イトコの写真だよ」

急に後ろから声が聞こえ潤はびくつとした。

いつの間に来たのか静かに立っている。彼は潤の手から写真立てを取るとこれ以上見るなと言うふうに伏せた。

「何か似てるな」

うん、と東雲は頷いた。

「葉山みどり、だろう？ 彼女の姉」

「恋人かと思った」

彼は少し自嘲するように笑う。

「そうだね、僕は結婚しようと思っていた」

イトコは結婚できただろうか。

不思議に思って尋ねると東雲は「法律上は」と曖昧に答える。

何となく、分かってしまった。

これ以上聞いて良いのだろうか。

目で尋ねると東雲は頷く代わりに答えた。

「親戚から反対されてね、それと、彼女を信じられなかった」

「今日のデートの相手って・・・」

「違うよ。彼女は友達の子」

「今、恋人は？」

「いないよ。・・・もう、十分だから」

言って彼は少し顔をしかめた。

教え子にそんな話をするつもりなんてなかった。

そんな感じの表情だった。

「後悔してる？」

東雲は観念したように首を振る。

「信じて突っ走れば良かったとは思っているよ。好きになったことを後悔はしてない」

黒い服が喪服のように見えた。

もしかして、と思うがそれ以上は続けてはいけない気がした。

一緒に暮らそうとしていた。もしくは一緒に暮らし始めていたのだ。その名残が、対になっている食器なのだろう。処分もされていないと言うことは、そんなに遠い過去でもないはずだ。

東雲は笑う。

はぐらかすようにキッチンスペースを向いた。

「そろそろ出来る頃かな」

「センサー・・・」

呼びかけると彼は潤の顔を見た。

「何で笑うの？」

無神経な問いかけだ。

だけど、東雲の笑顔には違和感があって、問いかけずにはいられなかった。

黒いシャツを着た男は少しだけ驚いたように瞬いた。

少しあって潤の頭を撫でる。

「今日の蒼井は素直だな。普段からそうなら心配する必要もないのにな」

「む？」

「国語の問題だ。さて、彼はどうして悲しい時にも笑うのでしょうか」

悲しい時に笑うとしたら、心配かけたくない、同情されたくない、人に知られたくないとかだろうか。

「十点満点中八点の答えだね」

「後二点は？」

「宿題だよ。どうしても分からなければここに聞きに来ればいいよ」
そう言って笑った東雲の顔は悪戯をしかけた子供のようにだった。
さっきの笑顔のような違和感はなかった。

23話 もう二度と孤独を抱かないように

「止めろ、城沢隆明！ 殺す気か!？」

突然、そう呼ばれ彼は驚いた。

ケンカの途中に誰かが乱入してきたのは知っていた。どうせ正義気取りのケンカ好きがタイマンじゃないのはフェアじゃないと入ってきただけなのだろうと思っていた。

誰かが自分の名前を呼ぶなんて思っていなかったのだ。

顔は知らない。

どこかで見たかも知れないが、覚えていない。

隆明は探るように彼を挑発した。

「何だよ、お前ボロボロじゃねーか。遊んで欲しいならもっとマシな格好でくるんだな」

ケンカに乱入するような血気盛んな人間なら、その挑発に乗ってくると思っていた。正気に戻れ、と一発くらい殴ってくると思っていたのだ。しかし、彼は本気で心配していたかのような目で、「人を殺すところだったんだぜ？」と続けた。

言葉をかけることくらい簡単だ。

人を殺してはいけけないと、言葉で言うことは簡単だ。その理由が説明出来なければ幼い頃に教えられていた言葉を言っただけの事だ。それは理由になんかならない。そんな当たり前の言葉なんて隆明には届かない。

だが、彼は自分の為なのだと言い切った。

不器用そうな表情で。

（面白いな）

普通に暮らしてきた男。

多少の悩みがあっても、隆明のそれと比べては些末と笑い飛ばされても文句を言えないくらい恵まれた環境で育ってきた普通の男。隆明が嫌ってもおかしくない甘えた考えをする男だ。

なのに、何故か興味を抱く。

上手く言えないけれど他の人とは違うと思ったのだ。

近付いて試してみたくなった。

言葉で言い表せない些細な疑問を、些細な違和感を拭う答えを彼が持っていると思ったのだ。

人に興味を持ったのはそれが初めてのことだったのだろう。自分から近付いてみたいと思った人間は安吾が初めてだった。

隆明は彼に近付き、彼と一緒に過ごし始めた。

そして、彼女に出会ったのだ。

初めは安吾の時と同様に興味だった。

お金持ちのお嬢様で自分とは正反対の位置に生まれた少女。

彼女に抱いた気持ちが好きなのか嫌悪なのか、どちらなのか彼には分からなかった。自分に怯えているくせに、笑って話しかけてくる。話しかければ笑って答える。

彼女を見ていると胸が締め付けられるような気分になった。

知らないはずなのにずっと一緒に過ごしてきたような感覚。それはまるで鏡を見ているような感覚に似ている。

正反対なのによく似ている。

それは安吾と藍も同じだ。

三人はどこか良く似ていた。

張り合わされた三枚の鏡。

覗き込めば万華鏡のように乱反射を起こす。

切なくて、泣き出したい気持ちにさせるのだ。

なのに、二人と一緒になら大丈夫な気がした。

自分の抱えている狂気も不安もすべてこの人達となら消せるような気がしたのだ。

それを証明したかった。

その正体がなんなのか知りたかった。

だから藍に告白しようと思った。

本当は、つき合っている二人の間に自分が立って、それでも一緒にいられるか確かめたかった。

けれど安吾は彼女に告白せず、彼女は自分を選んだ。

ある意味最高の形だったのかもしれない。

自分には彼女がいて、親友もいる。3人でいることが当たり前で誰も違和感を口に出したりしない。だから、今までの中で一番自然で、幸せな時間だった。

「・・・寝ちゃったみたい」

まどろみの中で彼女の声を聞いた。

暖かい日差しの屋上、三人の特等席。

今までなかった穏やかな時間。

「こいつ、いつもここで寝るよな」

「気持ちいい場所だからね」

上から声が降ってくるのは彼女の膝の上にいるからだだろう。寄りかかっているつもりがいつの間にか膝の上に寝ころんでしまったようだ。

「と言うより藍に甘えているんだろうな。案外とガキ臭いところあるから」

安吾が笑う。

ガキ臭いのはお前だって同じだろう、と言いつ返したかったが、眠くてそんな気力もない。

藍の細い指が隆明の髪をそつと撫でる。

「私、そう言う方がほつとするな」

「何で？」

「だって隆明って誰といてもどこか無理しているもの。自分でもどれが本当なのか分かっていないみたい。・・・だから、私たちの前だけでもこうしていてくれるとほつとする」

「母親みたいな言い草だな」

「・・・、いつか本当になればいいなと思って」

「は？ 何お前こいつの母親になりたいって・・・」
違うよ、と彼女は笑う。

軽い振動が耳の辺りから伝わってくる。

「そうじゃなくて、優しくて、甘えん坊の彼が、当たり前になればいいと思っているの」

「よくわかんねーけど、そう簡単なもんじゃないと思うな」

「そう？ 優しくなりたいたいと思って優しくしていればいつか本当になると思わない？」

「それは偽善だろう」

「偽善でも何でも人に優しくできる人は本当に優しいんだよ・・・
ってこの間読んだ本に書いてあった」

ぷっ、と安吾が吹き出す。

「何だ、受け売りか」

「いいじゃない、気に入ったんだから」

藍はそう言って笑う。

少し分かった気がした。

どうして心地良いのか。

どうして二人といるとほっとするのかが分かった気がした。

大丈夫だ。

この二人と一緒になら自分はもう大丈夫。

（あー、だっせー・・・泣きそう・・・）

彼は少しきつく目を閉じた。

そうしないと涙がこぼれ落ちてしまいそうだった。

この時間が永遠と続くと信じていた。例えば三人がそれぞれの道に進んだとしても、会えばきっと今と同じように笑い会える。

そう信じていた。

奴が、

父親が、自分を訪ねて来るまでは。

24話 過ぎ去った悪夢は二度と蘇らないと思っていたのに

何年振りかに父親の姿を見た瞬間、隆明は自分で表情が凍り付いたのが分かった。

学校の校門の前で無骨な時計をちらちら見ながら待ち伏せている場違いな男。記憶にあるより痩せこけているが、それが男の獣のような瞳を強調しているように見えた。

慌てて昇降口に身を隠す。

それは高校三年の秋が終わり、冬が始まった頃の事だった。藍が父親が教授を務める大学に、安吾が考古学を専攻する大学に、自分が誰かが知っている頭がいいとされる大学に進学を決めた頃の話だ。三人でいることが当たり前の時間が終わりそうなのにも関わらず、誰もがその先、三人でいられる事に疑いを持っていなかった頃、忘れていたはずのあの悪魔が再び姿を現したのだ。

藍が怪訝そうな顔で隆明を見つめた。

「どうしたの？」

「お前、顔色が悪いぞ」

問いかけるのは恋人と親友。

悪夢が蘇った気がして酷く動揺するが、すぐにそれを隠す。笑い顔で覆い隠す。分からないように、気付かれないように。

「何でもないよ」

むっとしたように藍が顔をしかめた。

「うそつき、何か隠している時っていつもそう」

「お前は分かりやすいんだよ」

安吾は呆れたように言う。

それで分からないかとも思っているのか。そう言いたげな口調だ。（だけど、そんなのお前らだけなんだよ）

二年と少し、一緒に過ごしただけの関係。

けれど、誰よりも隆明のことを理解していた二人。この二人に、

あの父親を見せるのは嫌だ。自分の狂気を背負わせるのは嫌だ。隆明はそう思った。

表情を読みとられないようにうつむく。

安吾だけを引き寄せて耳元で囁いた。

「……だよ」

「ん？」

「下痢してんだよ」

「何だ、そんなことか」

ほっとしたように安吾が言う。

「だったらとっとと行ってこいよ。待ってるから」

「いや、先に行ってくんね？ ほらさ、色々あるわけだから」

言いにくそうにごによごによと誤魔化す。

ちらりと藍を見ると、合点がいったように安吾は頷く。

「……分かった、お前の名誉の為に先に行つてやる」

「恩に着る」

笑って安吾は内緒話を初めてしまった二人を面白く無さそうに見ていた藍に言う。

「おい、藍、先にいくぞ。隆明は便所だつてさ」

藍が唇をへの字に曲げる。

隆明は安吾を睨み付ける。

「くそつたれが、覚えてろよ」

あはは、と笑って彼は藍を連れて校門の方に歩き始めた。

正直、助かったと思った。

藍には誤解されたかもしれないが、些細な事だ。

それよりも今重要なのはあの男の事だ。

二人が学校の前からいなくなる時間を考えて間を置いて、校門の方へ歩き始めた。軽く顔を叩いて気合いを入れる。

自然に目つきが暗くなった。

校門を出て、隆明の姿を認めると父親は笑った。引きずり出されて折檻された時の記憶が蘇る。

ポケットに突っ込んだ手がじつとりと汗をかいた。

「久しぶりだな、隆」

「何だよ、どの面下げてここまで来たんだ？」

挑発するように嘲った。

「父親に対して随分な言い草じゃねえか」

「父親？ そう名乗るならそれらしいこと一つでもしてから言えよ。
クソ野郎が」

「随分と強くなったそうだなあ、隆。だがそのケンカで鍛えた腕力で俺に勝てると思ったら大間違いだ」

全身の毛が逆立ったのを感じた。

強くなろうと思った。

それは多分、この男を殺して自分の過去に決別するため。けれど、
実際対峙すると、すくみ上がった。勝てる自信がなかった。

技も力も自分の方が上だ。

頭では分かっている。だが、過去の記憶のせいで思うように動かないのだ。睨み付けて立っているのだってやっとなのだ。

父親が、近付いた。

「お前頭が良いんだってな、その頭脳で簡単に稼げるだろう？ 父
さんな、困ってんだよ」

「金の無心か。お前にやるような金なんか一文もねーよ」
くっ、と父親が笑う。

まとわりつくような嫌な笑い方だった。

「さっき、藍って娘が俺の前を通り過ぎた。いい女じゃねえか」
だめだ。

こいつは全部調べて来ている。

逆らえば自分だけじゃなく、藍や安吾までに害が及ぶ。

（冷静になれ）

隆明は自分の頭呼びかけた。

自分なら出来るはずだ。どうすればこいつから二人を守れるか。
そのくらい冷静になって少し考えればすぐに答えが出るはずだ。

まずは信用させろ。

自分は儲けさせることの出来る人間だと。約束さえ守れば絶対に美味しい思いをさせてくれる人間だと信じさせろ。

隆明はへらりと笑う。

「あんたさ、子供のオモチャに手をだすなよ。せっかく愛着が湧いたところなんだからさ」

「心が次第だな」

「心がけねえ」

見透かされているような気がした。

隆明がどれだけ彼らを大切に思っているのか、既に男が知っているような気がした。

それでも覆い隠すように隆明は笑った。

「いいよ、どうせ退屈したところだから、正義の味方やってやるよ。俺は自分のオモチャを守るヒーローだ、で、お前は悪の大ボス、オーケー？」

悪の大ボスはいずれヒーローの手で殺される。

それが、王道だ。

「期限は俺が飽きるまでだ。せいぜい俺が飽きないように面白い脅し方してこいよ。どんだけ儲けられるか、あんた次第だからな？」

空虚に笑う。

今度こそ守りたい。

この男の手から、大切な人達を。

例えばそのことで自分が悪役になったとしても、この男と差し替えたとしても、絶対に二人を傷つけさせたりしない。

最初から、こいつだけは殺そうと思っていた。

家族を滅茶苦茶にした奴。

狂気だった。

沸々と蘇ってくる感情はただ男を殺そうとしか考えていなかった。殺さなきゃ終わらない。殺さなきゃ守れない。

（だったら、殺るしかない）

全部一人で。

二人に、自分の狂気なんか背負わせたりしない。

25話 朝日の昇る頃、彼女と彼は

朝早い時間は迷惑だと知っていたが、タクシーを呼んだ。

まだ夜明け前の暗い時間帯。昨日は結局ろくに眠れなかった。

藍は明け方間近になって電話を取った。どうしても、あの高台にある公園に行きたくなったのだ。

安吾の事もあって気が落ち込んでいたし、少し気分転換をしたかったのもある。元々何かに行き詰まった時、家の中で息が詰まりそうになった時、あの公園に行く。明るい未来を話していた高校時代の思い出がいっぱいに詰まった場所へ。そこへ行けば気持ちが悪くなるし、何かを決めかねている時に踏ん切りがつくのだ。

しかし、突然行きたくなった理由は実のところそれだけではなかった。

何故か行かなければならない気がしていたのだ。まるで何かに呼ばれているような感覚とでも言うのだろうか。あの場所に何かがあるような不思議な予感がしたのだ。

タクシーの運転手は、こんな時間に人気のない公園に向かおうとする女を不審そうに見ながらも「朝日を見に行くのだ」と告げると納得したように頷いた。

料金を払い、タクシーを降りると彼女はあの柵のある場所へと向かった。

少し明るくなり始めた空が公園内をぼんやりと映し始めている。

「・・・」

彼女はふと足を止めた。

あの柵に寄りかかるようにして空を見上げている人がいた。高校時代、つき合っていた城沢隆明の姿が重なって見える。

だが、そうでないことはすぐに分かった。

彼は、隆明ではない。

「蒼井くん」

呼びかけると、彼はこちらを向いた。

こんな時間に藍がいることに驚きもせず、彼はにこりと笑った。

「もうすぐ陽が昇るよ」

藍は頷いた。

「知っているわ、空を見るとわかるもの」

「そうだね。ここ、来る？ 特等席だよ。空が一番綺麗に見える場所だから」

「知っているわ。だから、ここに來たの」

藍の言葉は拒絶ともとれるような淡々としたものだったが、そうではないことが声音で分かってしまうだろう。

蒼井は少し横に移動して彼女の場所を用意した。

彼女はそこに並んで空を見上げる。

不思議な感覚だった。

彼といることに何の抵抗感も罪悪感もなかった。何年もそうして隣に並んでいたかのように自然だった。

隆明と・・・いや、彼の生まれ変わりと一緒にいるかのようにだった。

七年前、彼が自分たちの前から姿を消した時、彼とは二度ともう会えない気がしたのだ。彼はもう死んでしまったのだと、心の中では確信していた。

なのに、彼の遺体が発見されないことをいいことに、藍はそれを見ない振りをしていたのだ。

そのくせ、彼の面影を探す。

彼の生まれ変わりを待っていた。

信じて待っているにはもう大人になりすぎてしまったというのに。今、隣にいるのは彼の生まれ変わりだ。

年から言えば輪廻転生で生まれ変わって來たということはあり得ない。

けれど、彼が生まれ変わって再び自分に会いに來た隆明のような気がしていた。

「私ね」

藍は吐き出すように言う。

蒼井がこちらを向いた。

「高校の時、とても好きな人がいたの」

「うん」

「だけど、酷い振られ方をしたの。私とは最初から住む世界が違うんだ、て・・・」

好きではなかった。

安吾に嫌がらせをするために、つき合っただのと言われた。言葉に深く傷ついた。

「酷い人だね」

「うん・・・酷い人だった」

だけど、彼を嫌いになることは出来なかった。

「だけど、彼は私のためにそう言ったのよ」

藍を突き放すために。

安吾という緩和剤を用意して、自分から離れるように仕向けるために、藍の一番言って欲しくない言葉ばかりを選んで傷つけた。信じたくなかった。

「私、彼がどうしてそんなことをしたのか、知っているの」

「え？」

だから信じたくなかった。

彼が、何故そんな手段に出してしまったのか、知っていれば一瞬でも彼の言葉に惑わされて逃げるべきじゃなかったのだ。

言葉に傷ついて逃げるくらいなら最初から彼には近付かない方が良かったのだ。

逃げなければ、彼はいなくならずに済んだのかも知れない。

「彼は、隆明は自分の父親から私たちを守ろうとしていたのよ」

「何で・・・藍さんが、知ってるの？」

「私の兄は刑事だった。・・・それから」

蒼井の方を見ると、朝日に照らされた瞳が水分を含んで小さく揺

れていた。今にも泣き出しそうな目だった。

彼女もまた泣きそうだった。

七年……。

そんな長い時間、誰にも言えず悩み続けたことを今、蒼井を通して隆明に告白している。

普通に考えれば生まれ変わりなんて、あるわけがないのに。

「彼の父親に一度だけ会ったことがあるの」

彼の父親は言った。

隆明は父である自分のことを憎んでいる、と。

その言葉だけで、隆明が父親に復讐しようとしている事が分かった。藍自信もその当時親に対して酷い憎しみを抱いていたからだ。今は薄らいだけれど、まだわだかまりは残っている。

経済的には不自由なく育った藍ですら、それだけ強い感情を持っていた。

隆明が憎む理由を知れば知るほど、彼がどれだけ憎んでいるのか測れなかった。だから彼を止めることは出来なかった。

……彼と一緒に堕ちることも怖かった。

「だから、私は知らない振りをしてしまったの。短い悲鳴を聞かない振りをした。……彼が復讐をしたのなら、それで彼が死んでしまったのなら、それは私のせいよ」

「それは……違うよ」

「どうして？ 彼を信じて彼の隣に並ぶことを選べば彼はまだそこにいたのよ。私が、殺したのよ」

認めたくなかった。

だからずっと見ない振りをしていた。

彼は生きている。自分たちを裏切ってどこかで笑って暮らしている、そう信じたかったのだ。

「違うよ」

蒼井は繰り返して言った。

「その人が堕ちたのはその人自身のせいだ。誰かを責めるのも、藍

さんが、自分を責めるのも間違っている。何より彼は、そうなることを望んでいたんだ。藍さんは彼のためにそうしてあげたんだよ」

「違うわ、甘えたのよ」

「違うじゃないよ。・・・俺が、その人なら今こう言うだろうね」

蒼井はそっと彼女の頬に触れる。

優しい手だった。

「俺のために、泣いてくれてありがとう」

「私・・・」

彼女は自分のまぶたに触れた。

泣いていた。

いつから？

多分、七年前からずっと。

26話 気が付けばもう長い時間が経っていた

何か言わなくては。

そう思ったが、涙にむせんで声が出ない。

忘れたことはなかった。七年間ずっと。

自分の隆明に対する思いが、安吾とうまういかない理由だと思っていた。だけど、そうじゃない。

自分も、安吾も分かっていたのだ。

彼が自分たちの為にわざと悪役を演じたことなんて、彼の普段を見ていればすぐに分かったはずのことなのだ。

なのに、二人とも認めたくなかった。

認めてしまえば隆明は死んでしまう。遺体は見つかっていないけど、死んだ人になってしまふ。彼は七年前に行方不明になって姿を現さない。そして、彼の父親を見たのも、七年前が最初で最後だった。

それはつまり、そういうことなのだ。

分かっていたから認めたくなかったのだ。見て見ぬ振りをした自分たちのせいで彼を失った。そんな重圧に耐えられるはずもなかった。

だから彼を生かそうとしていた。

「酷い人」として。記憶に残し続けることで、想い続けることで彼は心の中に生きている。

けれどそれはもっと酷いことだ。

自分の心を救うために全て隆明のせいにして。

そして、代わりになろうとした安吾まで責めていた。

(・・・最低だわ、私)

結局自分のことしか見えていなかった。

それでみんな傷つけた。

ふと、蒼井の手が藍の髪に絡みついた。

思いの外大きい手が、彼女の髪を撫で、抱え込むように抱きしめる。

彼は少し笑っていた。

何も言わず抱きしめて、少しだけ笑った。

隆明もきつとこうして笑って許してくれるだろう。そう言う人だった。藍と安吾の前だけはそう言う優しい人だった。

甘えて来る代わりに寛容だった。その彼があ最後の時だけは決して甘えなかったのだ。それが何よりも悲しい。

今、彼はどこにいるのだろうか。

どこで、二人を待っているのだろうか。

突然、タイヤがこすれる音が響いた。猛スピードで公園の前に何が停車しようとしたのだ。微かに煙を上げて、バイクが公園前に停車している。

降りてきたのは黒い革ジャンを着た体格の良い男。

遠くから見ても誰なのかが分かる。

激昂しているのか、それとも朝日を反射させているのか彼は真っ赤な顔をしていた。バイク同様、凄いスピードで二人に向かって走ってくる。

「安吾！」

藍は悲鳴を上げた。

瞬間、隣にいた蒼井の姿が消える。

彼の拳に叩き飛ばされたのだ。

「つってっ！ いきなり殴るなよな！」

「うるせえ！ お前、藍に何をした!？」

「何もしてねーよ・・・まだ。つか、好きにしろって言ったくせにこれは無いんじゃないの？」

蒼井は殴られた頬を押さえて抗議する。

安吾は構わず彼の襟首をつかみ上げた。

「だからといって泣かせるな！」

「ちよつとまって、安吾！」

「藍は黙ってろ！ あんなメール送りつけて、こいつは泣いてて、それで何もありませんでしたなんて誰が信じるか！」

「安吾、本当に違うの！」

藍は必死で止める。

この勢いではこのまま殺してしまいそうだった。

「朝日を見に来たら、彼がいて、話し相手になってもらっていただけよ。泣いていたのは、昔のこと思い出して・・・それで」

安吾の力が少し緩んだ。

「・・・彼のせいじゃないのよ、本当に」

するり、と蒼井の身体が落ちた。

襟元を治して、彼は口の端を拭った。

口元には微かに赤いものがついている。

「痛えー、口の中切れたじゃねーか。馬鹿力で殴るんじゃないよ」

「わ、悪かった」

安吾は自分の冒した失態に気付き項垂れる。

彼はむっすりとした顔で答える。

殴られた場所が少し赤く腫れ始めている。

「んー、まあいいけどさ、だけど、あんな挑発メールにのって来るくらいなら、最初から手を離したりするなよ」

「メール？」

安吾を見上げると、彼は真っ赤になって口を押さえた。

一体どんな内容のメールが送られたのだろうか。

それより、何故蒼井が彼のアドレスを知っているのだろうか。藍の知らないところでどんなやりとりが交わされていたのだろうか。

少し笑って蒼井が言う。

「まあだけど、あんたさ、前に見た時よりマシな顔つきになってるぜ。藍さんもだけど。二人とも何か吹っ切れた顔してる」

藍は安吾を見た。

ちようど彼も藍を見つめていた。

「ちゃんと話せよ。高校生に促されるようじゃ情けないけど」

嫌味を言って、彼は二人の横を通り過ぎる。

「別れるなら、俺が藍さん貰うから」

「藍はものじゃない」

「知ってるよ。・・・後悔しないようにね」

後ろ姿はどこか寂しげで、それなのに何故か清々しいような気配も漂わせていた。

歩くのよりも少し早足の様子で彼は自分のバイクの方に向かって歩き始める。

「蒼井くん」

藍はその背中を呼び止める。

ぴたり、と停まって彼が言葉を待っていた。

振り向かない。

表情が見えない。

・・・今度こそ、かける言葉を間違えたりしない。

「ありがとう」

なんの、と彼は後ろ向きに手を振る。

表情は見えない。

だけど、笑っている気がした。

※ ※ ※

バイクに戻って潤はミラーに映る顔を見た。

殴られた場所がくつきりと赤く腫れている。

ケンカに巻き込まれることが多いため、携帯している冷却スプレーを顔に向けると、冷たい粒子が熱を帯びた部分に付着する。

心地良いけれど少し痛いくらいだった。

微かに涙がにじむ。

「あーあ、失恋かな」

潤は自分を笑ってヘルメットを被った。

彼女が誰の事を好きか何て、すぐに分かった事だ。自分と誰かを重ねて見ていること何てすぐに分かったことだ。

だからショックは少ないけれど、やっぱり少し辛い。

せっかく好きになったのに、結ばれない恋は少し悲しい。

けれど、藍が幸せならいい。

悔しいけれど、麻木と彼女は良い感じた。

彼らは同じものを乗り越えて来たのだ。

だから、悔しいけれど、これで良かったのだ。

潤はアスファルトについた焦げたタイヤの後を靴でなぞった。

これが麻木の答え。

ありがとう、の言葉が彼女の答え。

「こう言うのだって、悪くないだろ、相棒」

彼はバイクを小突いてエンジンをかける。

答えるように快調なエンジンの音が朝の高台に鳴り響いた。

27話 『I never forget you』

向かい合って二人は言葉に詰まった。

最近は上手くいっていなかったとはいえ、七年もつき合っているし、それ前からも友人関係であったために、もう兄弟くらい頻繁に顔を合わせている存在だった。

それなのに、何故だか久しぶりに顔を合わせるような気がした。先刻まで東雲色に空を染め上げていた太陽は既に少し高い位置にあり街を照らし始めている。朝の早い職業の人達はそろそろ起きて活動を始めている頃だ。

街を見下ろすように柵に寄りかかりながら彼女はにこりと笑った。

「・・・何か、久しぶりだね」

「二人で来るのは久しぶりだな。俺は時々来ていたが」

「私もだよ」

そうだったな、と安吾は口をへの字に曲げた。

お互いにここは思い出の場所なのだ。少し前は二人で一緒に来ることもあったし、高校の時は隆明と三人で来たこともあるのだ。

ここは「隆明のお気に入り場所」なのだから。

沈黙があって、彼は俯いた。

言いにくそうに、それでも真摯な口調で言う。

「ゴメン、俺、浮気した」

彼を見上げる。

浮気しているのだというのは分かっていた。あの大学で会った女の人と、浮気しているのだろう。分かっているけど彼の口から直接聞くと、心に波が立った。けれど、彼を責める気にはなれなかった。

藍は彼を見つめたまま微笑む。

「・・・うん、知ってた」

答えると、彼は驚いたように藍を見下ろした。

視線が交わるとぼつが悪そうに逸らされる。沈黙の後、かれは「

そうか」と小さく呟いた。

「もう二度としないから。裏切ったりしない」

「私も、安吾のことちゃんと見るから」

迷ったりしないように見ているから。

安吾が彼女との浮気に走ったのは藍にも責任がある。彼を見ずに、隆明を求め続けたから。彼の優しさに甘えて彼そのものを見てこなかったのだ。

そんな状態で一緒にいて面白いわけがない。

本当は、今誰が好きか分かっているのに。

隆明の身代わりになろうとしてくれた優しい安吾。

無理して彼のような優しきで振るまっていたけれど、そうできる彼は本当に優しいのだと思う。

その彼のことはずっと好きだった。

隆明と三人でいる時も、ちゃんと彼のことも好きだった。だから三人でいるのが普通だったのだ。

その気持ちは今も変わっていない。

藍は彼の目を見たまま最初で最後の告白をする。

「私、隆明のこと好き」

「・・・俺もだよ。俺もあいつのことが好きだ。正直、藍が俺よりもあいつを選んだとしても責めること出来ない。だけど今は」

人差し指を一本立てて、彼の言葉を遮る。

隆明はもういない。

いなくなった人をずっと好きでいても、自分の心が満足するだけで何も生まない。

彼がもう一度他の誰かになって戻ってくるのを待てるほど、純粹でも、一途でもない。こんなことはもっと早く自覚すべきことだったのだ。

「覚えていよう？ 隆明のこと。私たちだけは忘れないでいたい。私は隆明が好きだけど、彼の面影が好きな訳じゃないわ。私がずっと」

と忘れられなかったのは、彼にお礼を言うことも謝る事も出来なかったから」

安吾は額を抑えた。

藍の位置から、彼が涙ぐんでいるのが見えた。

「……同じ事を、考えていたんだな」

藍は頷いた。

隆明のことが終わった訳ではない。もう一度出会えば同じように好きになるだろう。でも今は、安吾の事が好きだ。

今まで分からなかったけれど、はつきりと言える。

「……好きだよ、安吾。ずっと前から」

「俺も、七年よりずっと前から好きだ」

初めの告白だった。

好きとか、愛しているとか、何度も言われたことがある。だけど、今までの中とは明らかに音の響きが違う。

これが安吾の最初の告白。

藍は微笑んだ。

安吾も少し不器用な笑いを浮かべる。

お互いにゆっくり距離を縮めた。

僅か、唇が触れ合う。

確かめ合うように瞳と瞳が交じり合う。

力強い手が藍の肩を抱いた。彼女も彼の首に手を回す。

深く、唇が重なり合った。

「……初めてみたい」

吐息と共に吐き出すと、言葉はそのまま彼の唇に飲み込まれた。

今まで何度もキスをした。

何度も抱き合った。

それでも、今ほど距離が短く感じた事は無かった。

七年もかけて、ようやく二人はこの距離に辿り着いた。

遠回りをし続けてしまった。

……後悔はしていない。

沢山傷つき傷つけた。

それでも今の気持ちが必要なら後悔はしない。することがあるとすれば七年前のことだけ。だけれどもう遅すぎる。

だから、後悔はしない。

「藍」

囁かれるように呼ばれる名前。

「安吾……」

呼び返す心地よい名前の響き。

何度もキスを交わした。

溝を埋めるように。

二人を隔て続けた距離を縮めるように。

何度も。

何度も。

28話 最後に残る記憶

藍をわざと傷つけ別れた後、隆明は父親を呼び出した。
人気のない山中。

いつも二人で会う時に使う場所だ。

何度も使った場所だし、それなりに儲けさせたのだから父親は自分の事を信頼している。父親は普段通りにここを訪れ、隆明の持ち出す儲け話にほくそ笑むのだろう。

彼のベルトにナイフが挟まれている事なんか知らずに。

殺そうと思っていた。

父親を殺して、早く藍と安吾を安全にしたかった。

その後、自首をするなり、逃げるなり好きにすればいい。

何もかも上手くいった後に決めればいいのだ。そのために、あんな酷いことを言って別れたのだから。藍が隆明の狂気まで背負ってしまったように。彼女が自分を追いかけて来ないように。

・・・二人が自分のことを忘れないように。

「よう、隆坊」

父親が隆明の姿を認めて近付いてくる。

相変わらず下種っぽい笑いを浮かべた男。隆明と再会してから羽振りが良くなったはずなのに汚らしい服を着ている。趣味も形も最悪だ。

隆明は無言で林の方を示す。

人目につきたくない、そう言って言いくるめたのだ。最初は隆明が殺すつもりで人気の無いところに引っ張っていくのかと疑っているようだったが、慣れた最近では唯々諾々と従うようになった。

信頼されている。

儲け話だと信じている。

今日で全て終わるというのに。

隆明は先に行く父親の背中を見ながら残忍に笑った。

「相変わらず薄気味の悪いところだな」

「ここが一番人目につかなくていいんだよ。上の山道は登山客が入っているけど、この辺りはもう何年も人が入ってない。・・・もつとも、俺たちは出入りしてるけどな」

言葉に応えたと父親が振り向く。

「何だ、今日は随分とおしゃべりじゃねーか」

「父親との親睦を深めようと思ってな」

「はーん？ 何か企んでるんじゃないだろうな」

「企むならもっと上手くやるよ」

へらり、と隆明は笑う。

狡猾で勘の良い男だ。

だからこそ卑劣なやり方で隆明を利用することを思い付いたのだろう。たかれるだけだったかって、利用できるだけ利用する。この男はこうして母親も苦しめて来たのだ。自分勝手なろくでもない男。

死んで当然だ。

父親は笑いを殺したように口元を歪めた。

「そう言う表情は、母親そっくりだな」

「・・・」

「あいつはそうやって笑いながら浮気していたな。お前も大概嘘が下手くそだ」

隆明は動揺した。

母親が浮気？

そんなことデタラメだ。

この男がまた自分を混乱させるために吐いた嘘だ。

そうに決まっている。

「何言ってるの？」

「ああ、お前は覚えていないのか。俺も若かったからな、裏切ったあいつも、あいつの血を引いているお前の存在も許せなかったんだよ」

嘘だ。

そんなの嘘だ。

例え本当だとしても暴力を正当化する理由になんかならない。
あんなこととして許される訳がない。

「全部母さんが悪かったとでも言うの？ あんたの、その口で」

「そうだよ、あいつが全部悪かったんだ。あいつさえ……」

ごほっ、と父親が咳き込む。

どうせ煙草の吸いすぎで肺が弱っているのだろう。

隆明は小馬鹿にしたように笑う。

「はん、年寄り臭えな」

びしゃ、と父親が何かを吐き出した。

汚い、と言いかけて彼は青くなる。

……血だった。

吐き出したのはどす黒い血。

初めて気がついた。

父親は、再会した時記憶にあったよりも小さくなっていった気がした。それは子供の隆明と成長した隆明との間で起こる軽いギャップなのだと思っていた。だが、父親は、再会してからもまた随分と痩せている。

病気をしている。

何の病だ？

これだけの血を吐いて、平気なのか？

色々と頭を駆けめぐる。

引き出しかけていたナイフがぽとりと地面に落ちた。

「……あんた」

「くそ、情けねえな。あと少しだったのに」

彼はその場に膝を折った。

赤い。

赤く染まった。

手のひらが、服が。

「……どういう事だ？」

父親は口の周りを赤くしたまま言う。

血の匂いがして吐き気がした。

「恨んでいるなら殺せよ、隆。お前ずっと俺のことを殺したかったんだろう？」

「何言って・・・」

「分からないでも思ったのか。俺は腐った野郎だがお前の父親だ。最期くらいお前の望みを叶えてやろうと思ったんだが、お前はなかなかそうしない」

じゃあ、最初から分かっていたのだろうか。

この男は、自分に殺されるために近付いて来たとでもいうのだろうか。

ナイフを隠していることなんか承知だったのだろうか。

隆明は拳を握りしめ奥歯を強く噛みしめる。

「・・・てめえの自己満足の為に、誰が殺してなんかやるか！俺の為？ 笑わせんなよ、お前は自分が救われたいから俺に殺されに来たんだろ？」

「そうかもしれない」

「そうだよ！ 大体・・・俺があんたを・・・殺せる訳が無いじゃないか」

涙で、父親の姿が歪む。

姿を現した時、藍のことを口にした時、殺そうと思っていた。だけどずっと迷っていた。

腐った野郎だけど父親なのだ。

間違はなく自分の父親なのだ。

「・・・あんたは、俺にチョコレートくれたじゃねーか」

「あんなこと、覚えていたのか」

「あんとき、あんた笑ってくれたじゃないか」

父親は怖かった。

あの瞬間の彼だけは好きだった。

その時の父親が本当だったら良かったのにと何度も思った。

結局、隆明はこんな恐ろしい父親でも好きだったのだ。
愛していたのだ。

「どんなに憎んだって、あんたは父親なんだよ
好きだったから許せなかったのだ。」

興味のない相手だったら、最初から切り捨てられるような相手だ
つたら隆明もこんなにも苦しまなかった。

迷わなかった。

出会った瞬間に殺してしまうこともできたのだ。

「……待ってろよ、じじい、人か救急車を呼んでくるから」
声が涙で揺れている。

「隆……」

父親の声音も同じだった。

見えないけれど、彼も泣いている。

「すまない……」

そんな言葉で許される訳がない。

だけど、助けなければ。

誰か助けを呼ばなければ死んでしまう。

死なせない。

隆明が本当に父親を許せる時まで死なせない。

山の中を駆け抜け、人がいる道路に向かって駆け出す。通った車
をつかまえて公衆電話か病院のあるところまで連れて行って貰おう。
事情を話せば父親を乗せていってもらえるかもしれない。

早くしないと死んでしまうから。

隆明は山間から飛び出し、山腹を走っている道路まで飛び出す。
どこかに車は。

彼が周囲を見回した瞬間、彼の身体は大きく横に飛ばされた。

（……何だ？）

身体が大きく宙を舞う。

何が起こったのだろう。

ばさり、と自分の身体が地面に叩き付けられるのを感じた。痛み

は不思議と感じなかった。

ひそひそと、誰かが囁きあう声が聞こえる。

男と女、酷く狼狽しているように聞こえた。

（・・・ちょうど良かった、親父が死にそうなんだ）

隆明は言葉を紡ごうとするが、声が出てこなかった。

身体も動かない。

暫くして男が隆明の身体を抱え上げた。

どこか暗くて狭い場所に押し込まれたのが分かる。

（冗談じゃない、病院に行かなきゃいけないんだ。なあ、俺の声、聞こえないのかよ）

声は声にならなかった。

病院に行かなきゃ。

病院に・・・

病い・・・

・・・

・・・

・・・

・・・ん

・・・くん

「潤くん！」

呼びかけられて彼は僅かに意識を取り戻す。

（・・・潤って誰だ？）

「先生、蘇生しました！」

女の、悲鳴にも似た安堵の声が聞こえる。

「潤くん、頑張って、あと少しだから」

（俺の名前？・・・ああ、そうか、「ぼくの名前」だ）

潤はうつすらと目を開いた。

覚えている。

大変な手術になるけど、頑張ろうね、と小児科の先生が言っていた。

手術が成功して元気になったら、他の兄弟達と同じようにお父さんも笑ってくれるだろうか。

うん、多分大丈夫だ。

今度目を覚ました時はもう大丈夫になっている。

潤は信じて再び目を閉じた。

穏やかな気分だった。

それが彼の最期で最初の記憶だ。

最終話 ここから始まる最初の話

「じゃあ、失恋したってわけ？」

「お前な、さらりと心決るようなこと言うなよ」

屋上のフェンスにもたれて潤は頬を膨らませる。

くすくすと笑いながら亜夜が詫びを入れる。

「ごめん、ごめん。だけど潤があんまり清々しい顔をしているから」

「・・・俺、そんな顔してる？」

「うん、前よりずっといい顔になったよ」

あまりにもさらりと言われたので潤は照れて赤くなった。

藍と始まりもしなかった恋愛を終えて、真っ先に報告したのは亜夜だった。彼はずっと潤のことを心配してくれていた。それでも彼に言うまでには少し時間がかかった。心の中で整理がつかないのもあったが、白骨死体を見つけてしまったせいであまり彼と話することも無かったためだ。

白骨死体を見つけて東雲の家に泊まった経緯を話すと、彼は自分のことのように憤慨した。そんな家に帰るくらいなら自分の家に泊まりに来ればいいと本気で言ってくれた。

彼の申し出を辞退したのは、東雲が先に保護することを申請したからだろう。

上手く行かない家庭にいるよりは担任である彼が保護して折りを見ながら話を付けるのが良いのだろうと嘆願書を提出したのだ。

まだ正式に決まったわけではないが、特例として認められそうだった。いずれ蒼井家から離れることになるだろう。もっとも、もう既に東雲の家から学校へ通っているのだが。

「だけど、良かったのか？ 亜夜までつき合うことも無かったのに」

「うん、その講演会なんかより潤の方が大事だから」

講堂の方では全校生徒が集まり「神田川藍」の講演会が始まっている頃だろう。

思えばその打ち合わせの為に彼女がこの学校を訪れたのがそもその始まりだった。幕も開かないうちに終わってしまったけれど、もやもやした感じはほとんど無かった。

いい恋をしたからだと思う。

いや、いい友達がいるからだろうか。

「亜夜」

「うん？」

「……サンキュー、な」

面を喰らったような顔。

少しあって笑う。

「どういたしまして」

ばたん、と屋上の扉が開かれた。

潤と亜夜は慌てて振り向く。

「やっぱりここだった！」

「げっ」

「何よ、その嫌そうな顔。言っておくけど私たちの方が迷惑してるんだからね。先生に捜しに行ってこいって言われて」

「さくらちゃん、言い過ぎ」

ずけずけと遠慮無く言う西久保の後ろで葉山がたしなめる。

潤は苦笑した。

「どうせあんたが天野くんを無理に誘ってサボらせたんでしょ？」

「いや、俺は……」

「蒼井はともかく天野くんは真面目なんだから巻き込まないでよ」

「真面目」

ぶっ、と潤は吹き出す。

外見が大人しそうな上に潤の側にいるから随分と真面目に見えるだけで、実際はそうでもない。

亜夜もまた笑いをかみ殺している。

「何よ」

文句でもあるの、とでも言いたげに西久保は頬を膨らませる。

元氣すぎる。

対する葉山は彼女の言動におろおろとするばかり。

対極にいる二人が一緒にいるのは何だか面白かった。

潤と亜夜の関係も周囲からそんな風に見えるのだろうか。

「わーったよ、戻れば良いんだろ」

「そのとおり。いやに物わかりがいいわね」

「潤は最初からそうだよ」

「お前な、微妙な褒め方するなよ」

「赤くなってる！ かーわーいー」

「うるせえよ」

からかわれて潤はふてくされる。

どうも調子が狂う。

潤に対してこんなにずけずけ言ってくるのは西久保ぐらいだ。遠慮がないというか、怖いもの知らずというか。呆れを通り越して感心する。

「ま、いいか。仕方ねーから戻るか」

「あっ・・・ちよつと待って」

出入り口に向かって歩き出した三人を引き止めたのは葉山だった。

「せっかくだから、もう少しここにいない？」

西久保は彼女の申し出に目を丸くする。

「あんた・・・まさかいつに感化されたとか」

葉山は慌てて首を振る。

「ううん、そうじゃなくて、ほら、天氣が良くて気持ちいいから」

「あ、ホント」

澄み渡った空は吸い込まれそうなほど深い blue。

空が少しだけ近くて、綺麗に見える。

学校の敷地内で一番空が綺麗に見える場所だ。

空を見ていると寂しさや不安、悲しみや悩みなんか全て持ち去ってくれそうな気がした。この広い空の下どこかで名前も知らない誰かが同じように見上げていると思うと、何だか一人では無い気が

していた。

だから潤は空が好きだった。

実際に今、一人じゃない。

亜夜がいて、西久保がいて、葉山がいる。

同じ空を見上げて何か思っている。

何かが始まりそうな予感がする。

今まで見てきたどの空より綺麗な空が広がっていた。

※ ※ ※

講演会が終わった後、藍は職員室でお茶に招かれた。

招かれたと言っても普通のお茶を飲んで雑談をするだけのもので形式張ったものではない。

端に座って教師達のお世辞を聞きながら愛想良く受け答えをする。誰かが付けたテレビでは昼のワイドショーで最新ニュースを読んでいる。

「ああ、これ、近くですね」

若い教師が声を上げた。

それは白骨死体が発見されたというニュース。

「今月に入って二件目ですか、一件目の第一発見者はうちの生徒でしたよね」

少し年配の教師が答える。

つい最近、この近くで白骨死体が発見された。身元は分かっているが長身の成人男子だと報道では伝えられていた。

そこから少し離れた崖下で、また同じような白骨が発見されたという。

ニュースは先だって発見された現場と、今回新たに発見された現場を映し出す。この辺りだという話だが、人があまり入らないところ

ろと言うこともあって藍には見覚えが無かった。

ブルーシートをかけてマスコミに見せないようにしながら警察関係者が慌ただしく動いている。

「物騒ですね」

そうですね、と答えようとして藍は自分が泣いている事に気がついていた。

「神田川さん、どうしました？」

慌てたように教師が立ち上がる。

藍は急いで首を振ってハンカチを取り出した。

「すみません、コンタクトがずれちゃって」

そう言ったが、藍の視力は悪くない。

コンタクトなんて大嘘だ。

「大丈夫ですか？」

「はい・・・ちよつと失礼します」

藍はそう言って職員室を出る。

ニュースは次の原稿を読み始めていた。

職員室を出ると廊下は静かだった。もう次の授業が始まっているのだらう。生徒の姿はどこにもない。

寂しい廊下で藍は目元を押さえた。

あのニュースで言っていた白骨。

隆明だ。

前に発見されたのが誰かは知らない。

だけど、今回見つかったのは隆明だ。

・・・そんな気がした。

七年もかかってようやく彼が戻ってきたのだ。

七年間もあんな寂しい場所で誰かに発見されるのを待っていたのだ。

そう思うと涙が止まらなかった。

「隆明・・・」

ずっと待っていた。

彼が帰ってくるのをずっと待っていた。
戻ってきた。

これでやっと彼は長い旅から戻ってきたのだ。
預かった卒業証書をようやく返せる。
やっと言える。

「・・・おかえりなさい」
眩くともどこからか暖かい風が吹いた。

『ただいま』

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6143c/>

空と輪廻と万華鏡

2010年10月8日15時56分発行